

《資 料》

オットー・レーマンの音楽活動

——久留米時代を中心に——

松 尾 展 成

- (1) 久留米収容所楽団の規約案と団員名簿
- (2) 久留米収容所楽団収支決算書
- (3) その他の会計書類
 - (I) 楽器部品・楽譜に関する請求書・領収書
 - (II) 募金関連書類
 - (III) 第16号バラック照明費用決算書
 - (IV) その他
- (4) レーマン宛て感謝状と久留米収容時代の新聞切抜
 - (I) レーマン宛て感謝状
 - (II) 久留米収容時代の新聞切抜
- (5) 恵比寿座演芸会参加者名簿
- (6) 楽譜, その他
- (7) 帰国後の音楽活動
- (8) 終わりに

(1) 久留米収容所楽団の規約案と団員名簿

オットー・レーマンは第一次大戦中に久留米収容所楽団の主宰＝指揮者であった。彼の長男が所蔵するレーマン関係資料は、松尾 2003(a), 第3節で紹介した経歴関連資料の他に、彼の音楽活動に直接・間接に関わる資料を含む。本稿は、久留米収容時代を中心とした、レーマンの音楽活動とその周辺についての資料を7つに区分し、紹介する。本稿で省略形で引用する文献の完全形は、松尾 2003(a), 第5節を参照されたい。本稿で初めて言及する捕虜も、松尾 2003(a), 第4節の関連捕虜人名目録にまとめている。

(1) 「レーマン主宰＝指揮・久留米収容所楽団に関して作成されるべき規約についての提案」〈推定1915年10月〉(本稿最後の図1を参照)。この資料を本稿では楽団規約案と呼ぶこととする。その抄訳は以下のとおりである。前文：上記楽団が近々解散することになった。楽団は1915年11月3日に再度結成されるべきである。楽団団員の権利と義務を規定する必要から、この楽団規約が提案される。「第1条 編成」。主宰者＝指揮者はレーマンである。正規団員は9人、すなわち、第1ヴァイオリンが[a]レーマン、[b]アスベックあるいはナック、助奏ヴァイオリンがアスベックあるいはナック、第2ヴァイオリンがハイムスとエベ、ヴィオラがゲーブハルト、チェロがニチュケとキューネ、バスがヴァイセンボルンである。さらに、ヴァイオリン奏者のエッケルトとプレントライン⁽¹⁾は最終的採用までは、助奏ヴァイオリンと第2ヴァイオリンを補強する臨時奏者であり、弦に対する請求権以外は何らの権利も持たない。「第2条 主宰＝指揮」。「主宰者＝指揮者にはレーマンが任命される。彼は、練習と演奏会を決定する権利を持つ。この点における彼の指令は無条件に(可能なかぎり——ナック修正案)従われるべきである」。「第3条 財産管理」。レーマンは楽譜を管理する。つまり、第3条の財産は楽譜のことである。「第4条 楽譜の所有権」と団員報酬。音楽基金⁽²⁾から支払われる、すべて

の楽譜は収容所楽団の所有とする。分譜の作成者には1ページに2.5銭、大型判1ページに5銭が音楽基金から支給される。写譜の場合を除いて、楽団は団員に対して完全に平等に支払う。捕虜期間の終了時にアスベック、ナック、エベとハイムスは、〈楽団に〉存在する楽譜の所有権を放棄する。職業音楽家、すなわち、レーマン、ニチュケ、ヴァイセンボルン、キューネとゲーブハルトは、〈楽譜の〉所有権について約定し、その結果をこの文書に記録する（上記の諸氏との協議の後、所有権は私のみに与えられた⁽³⁾）。「第5条 この文書に予期されていない事例…」、このような事例は、〈団員の〉単純多数決によって調停される。「第6条 音楽基金」、第6条によれば、楽団は以下を現在所有する。(a)楽譜、(b)現金2.26円、(c)手元にある弦、(d)転写機。なお、(b)の現金は、〈旧〉楽団解散の際の残金53.76円などから、分譜作成者レーマン、ヴァイセンボルン、キューネとゲーブハルトに対する謝礼26.88円、弦の代金19.53円などを差し引いた残額である。以上が本文である。本文に対する付記の中では、次の点が注目される。この日に、予備下士官ハリアーは決算をして、職務から退く。〈職務〉補充者が選出されねばならない。団員はこの文書を読んで、希望する修正を書き込むこと。規約は次回の練習の際に決議される。署名 カルル・ハイムス、H. エベ、オットー・レーマン、R. ニチュケ、K. ナック、H. ヴァイセンボルン、O. ゲーブハルト⁽⁴⁾。付記にある、この日とは、本稿第2節(c)と(d)の資料によれば、1915年10月21日であろう。

この楽団規約案はレーマンによって作成されたであろう。そして、正規団員として提案された9人のうち、少なくとも7人の署名が読み取れるから、楽団規約案はほぼそのまま収容所楽団の規約となった、と考えられる。

楽団規約案から次の事情が判明する。第1. 1915年10月21日に収容所楽団は一度解散し、会計責任者ハリアーは退任した。同楽団は、名称はそのままで、同年11月3日に再組織された。本稿第2節(3)によれば、旧楽団から新楽団に移ったのは、レーマン、ゲーブハルト、ヴァイセンボルン、キューネの4人である。彼らは、楽団規約案第4条に職業音楽家として名を挙げられた5人に含まれる。第2. 収容所楽団は1915年11月初めには正規団員9人から編成されていた。第1ヴァイオリン [b] の担当者と助奏ヴァイオリンのそれは同じである。彼らの中の8人は本節(2)の収容所楽団団員名簿に含まれる。ただし、楽団規約案でヴィオラとされているゲーブハルトと、チェロとされているニチュケは、楽団団員名簿では前者がトランペット、後者がトロンボーンである。この2団員と同姓の久留米収容捕虜は、1915年にも1917年にも1人ずつしかいなかったから、別人ではありえない。規約案作成後にトランペットとトロンボーンが獲得され、2人はそれを担当するようになったのであろう。本稿第2節の収容所楽団収支決算書で管楽器が初めて記載されたのは、1919年6月である。第3. ここで正規団員とされた9人のうち、最初から久留米に収容されていた人は6人（ただし、本所か支所かは不明）、熊本から久留米に移された人は3人であった（臨時奏者2人はいずれも熊本から移動した⁽⁵⁾）。したがって、両収容所の統合は、そして、おそらく久留米収容所の本所と支所の統合も、収容所楽団の発展にとって大きな意味を持っていた。第4. 楽団規約案で第1ヴァイオリン(b)あるいは助奏ヴァイオリンの1人とされているアスベックは、団員中ただ1人のオーストリア軍兵士であった。しかし、アスベックは1918年に習志野に移されたために、収容所楽団団員名簿には記載されていない。第5. 楽団規約案は正規団員の以外の臨時奏者として、エッケルトとブレントラインの2人に言及している。そのうち、前者は楽団団員名簿に載せられている。しかし、後者は、最後まで久留米にいたけれども、楽団団員名簿に含まれない。第6. 楽団規約案は日付の記載を欠く。しかし、内容を読み取ると、1915年10月21日の旧楽団解散直前に作成・署名されたであろう。

(2) 「日本・久留米捕虜収容所の収容所楽団 1914-1920」。この資料⁽⁶⁾（以下では楽団団員名簿と呼ぶ）には団員の肖像が4段に分けて、担当楽器名とともに印刷され、団員が署名している。肖像は (i) ナック、(ii) ヘルトリック、(iii) コーツァー、(iv) エッケルト（以上第1ヴァイオリン）、(v) レーマン（主宰者＝指揮者）、(vi) ヘック、(vii) ハイムス、(viii) クルーゲ、(ix) デューニッシュ（以上助奏ヴァイオリン）、(x) エベ、(xi) フレーベル（以上第2ヴァイオリン）、(xii) ヴァイセンボルン（コントラバス）、(xiii) ベシユテル、(xiv) オルトレップ（以上ヴィオラ）、(xv) ハーケ、(xvi) キューネ、(xvii) ゲーリック（以上チェロ）、(xviii) ヴィルト（フルート）、(xix) ヒューン（クラリネット）、(xx) ゲーブハルト（トランペット）、(xxi) ニチュケ（トロンボーン）である。これに、(xxii) エームンツ（楽団用務員）が加わって、22人となる。肖像の最上段（(i) から (ix) まで）はピラミッド形に配置されており、その中央・頂上部に (v) レーマンが置かれている。

この楽団団員名簿で次の点が注目される。第1. 収容所楽団は、主宰者＝指揮者レーマンを含めて、第1ヴァイオリン4人、助奏ヴァイオリン4人、第2ヴァイオリン2人、ヴィオラ2人、チェロ3人、コントラバス1人、フルート1人、クラリネット1人、トランペット1人、トロンボーン1人、合計21人⁽⁷⁾から構成されていた。第2. 署名欄には21人の署名があって、レーマンの署名はない。したがって、この楽団団員名簿は、団員たちが久留米収容所時代の記念のために署名して交換したものの中の、レーマンの分であろう。第3. ここでは収容所楽団の始期は1914年、終期は1920年とされている。しかし、1915年6月以前の収容所楽団の活動は実証されていない。他方で、久留米収容捕虜の8割以上は、レーマンを含めて、1919年末に解放された⁽⁸⁾。したがって、1920年には収容所楽団は解散していたはずである。この楽団団員名簿は、収容所からの解放は決定したけれども、その期日がまだ確定しない時期に、すなわち、1919年12月末より少し前

に、編集・印刷されたのであろう。第4. これらの団員を俘虜名簿 1917と対照させてみると、士官はヘルトリック男爵だけであり、貴族も彼だけであった。また、すでに本節(1)で言及したように、1918年に習志野に移されたアスペックは、楽団団員名簿に記載されていない。

本節(1)によって1915年11月の収容所楽団団員が、本節(2)によって1919年12月の団員が判明した。さらに、本稿第3節の(IV) (1)が1916年7月の団員を明らかにするであろう。

(注1) ここに名を挙げられた11人(臨時奏者を含む)は、俘虜名簿においてカッコ内の俘虜番号を持っていた。レーマン (571)、アスペック (3192)、ナック (3542)、ハイムス (479)、エベ (3269)、ゲーブハルト (438)、ニチュケ (618)、キューネ、ヴァイセンボルン (809)、エッケルト (3274)、プレントライン (3213)。青島捕虜の最初の収容所は、瀬戸 2001, p. 59によれば、316から852までが久留米、3181から3831までが熊本であった。したがって、レーマン、ハイムス、ゲーブハルト、ニチュケ、キューネ(下記を参照)、ヴァイセンボルンの6人が久留米、アスペック、ナック、エベ、エッケルト、プレントラインの5人が熊本であった。ただし、キューネは526のマックス・キューネである。俘虜名簿 1915, pp. 2, 34; 俘虜名簿 1917, pp. 2, 34 [外交史料館]によれば、久留米収容の士官キューネはおらず、下士官・兵士として前者は3人、後者は2人のキューネを記録していた。後者の2人とは3468のアドルフと上記マックスである。アドルフは最初は熊本に収容されたはずである。本節(2)の楽団団員名簿もキューネを載せているから、問題のキューネはアドルフかマックスかである。そのうち、アドルフは1919年6月から日本製粉(株)久留米工場に蒸気機関火夫として雇用され、1日に8時間労働した。久留米収容所 2003, p. 24. そのために、私は収容所楽団団員のキューネの名をこのアドルフではなく、マックスと想定した。

(注2) 久留米シンフォニー・オーケストラの指導者フォークトも同じ方向で活動した。彼は「パートの楽譜作成の資金集めのために音楽協会を創立した」。久留米収容所 2003, p. 153.

(注3) この加筆部分はレーマンの補足と考えられる。「私に」という表現を用いた本資料が、レーマン関係資料に入っているからである。

(注4) ここに、薄い文字がさらに書かれているが、判読できない。収容所楽団団員に予定されているアスペックとキューネの署名ではなかろうか。キューネは本節(2)の楽団団員名簿に掲げられている。また、本稿第2節(29)によれば、収容所楽団は「習志野への出発に際して」アスペックに餞別を贈った。したがって、2人は新楽団の団員であった。

(注5) 楽団規約案に記された新収容所楽団団員の中で、1915年10月に旧収容所楽団から退団したのは、レーマン(ヴァイオリン)、ゲーブハルト(ヴィオラ)、キューネ(チェロ)、ヴァイセンボルン(バス)の4人である(本稿第2節(3)より。カッコ内の担当楽器は楽団規約案による)。この4人は最初から久留米に収容されていた。1915年6月の収容所楽団第1回演奏会に参加したのは、主宰者レーマンと誰であろうか。同年8月10日付の投書(本稿第4節(II) (2)を参照)がいくらか示唆してくれる。第1に、投書に付けられた、久留米収容所楽団の写真には、ヴァイオリン3(うち1はヴィオラであるかもしれない)、チェロ1、ギター1、打楽器2が写っている。バスはない。第2に、投書本文に、「楽団は今ではバス1丁とヴァイオリン数丁によって、非常に好ましく強化されています」とある。したがって、少なくともヴァイセンボルンは第1回演奏会に参加しなかったのではなかろうか。

(注6) 松尾 2002(d), p. 119の図1. ——楽団団員名簿の上部と左右には絵が描かれている。上部は久留米収容所の高い板塀と衛兵詰所を、肖像と署名の部分の左右は板塀の外側の鉄条網を示すであろう。これを描いたのは、シュタイツである。欄外左下にシュタイツ、欄外右下に久留米と記されているからである。——久留米収容所の板塀と鉄条網については、松尾 2003(a), 第2節(1)を参照。青島捕虜の解放・日本出発に先立って、捕虜全員の名義で「東アジアの同胞」に送られた感謝状にも、この楽団団員名簿のスケッチと同じものが用いられた。賞状のコンテストでこれが優秀作に選ばれたのである。習志野市史研究 2003, pp. 106-107を参照。このスケッチは久保 1920のカットにも用いられた。

(注7) すでに紹介したように、収容所楽団は、展覧会案内書 1918; 久留米収容所 1999と横田 2002では13人の弦楽楽団とされていた(久留米収容所 2003では「少人数の」サロン・アンサンブル)。また、久留米収容所 1999, p. 122の写真69に示された収容所楽団も、13人から成る。この写真は久留米収容所 2003, p. 192の写真36と同じであり、ここでは「レーマンの楽団」とされている。それに対して、「戦争捕虜に楽譜を」という1915年8月10日付け投書(本稿第4節(II) (2)を参照)の最上段には、練習中の久留米収容所楽団(弦楽器5人と打楽器2人)の写真が掲げられている。この「写真からお判りになるように、我々は1楽団を創設しました。楽団は今ではバス1丁とヴァイオリン数丁によって、非常に好ましく強化されています」と投書本文は述べている。この写真と投書本文から、1915年8月には〈旧〉収容所楽団団員は8人余りであったのであろう。本節(1)の楽団規約案(1915年10月)は新楽団の正規団員を9人の弦楽器奏者としていた。楽団団員名簿は弦楽器奏者だけで14人を示している。新楽団の正規団員数の推移(最大で11人、1919年末には9人)については、本稿第2節本文末尾を参照。それぞれの段階で誰が退団し、誰が入団したか、はほとんど確定できない。楽団団員名簿記載の21人は正規団員以外の団員を含むはずである。

(注8) 久留米収容所 1999, pp.6, 40; 久留米収容所 2003, p.184. レーマンについては, 松尾 2003(a), 第3節の軍歴手帳とレーマン履歴書とを参照.

(2) 久留米収容所楽団収支決算書

ここで久留米収容所楽団収支決算書と総称するものは, レーマン関係資料中の以下の資料である.

- (a) 第1回音楽・演劇基金決算書(1915年8月分, 8月30日付. 本稿最後の図2を参照),
- (b) 第2回音楽基金決算書(1915年9月分, 10月1日付および10月26日付),
- (c) 第3回音楽基金決算書(1915年10月の旧楽団解散時, 10月21日付),
- (d) 第4回決算書(1915年10月21日の〈旧〉楽団の解散から11月4日における楽団の新規編成まで, 16年⁽¹⁾11月3日付),
- (e) 第5回音楽会計決算書(1915年11月4日から1916年7月1日まで, 1916年7月1日付),
- (f) 第6回音楽会計決算書(1916年7月1日から10月1日まで),
- (g) 第7回音楽会計決算書(1916年10月から1917年10月まで), および,
- (h) 1917年11月から1919年12月までの楽団収支決算関係書類.

このうち, (h)は音楽会計決算書の表題を持たない. しかし, その最初の月, 1917年11月の収入繰越額と支出繰越額が同年前月, すなわち, (g)の最終月のそれと一致するので, (h)は, (g)と連続する書類である. また, 第5回音楽会計決算書までの書類には(第4回までは単独で, 第5回では会計係とともに), レーマンが署名している. 第6回以後には署名がない.

以下の紹介では, 原則として収支の日付を省略する. ある項目が, 同じ月(期)に数回に記帳された場合には, 合計額を掲げる. 収入と支出の項目はしばしば多岐にわたるので, その中で主要な項目, あるいは, 私の関心を惹いた項目を, 円単位で記すにとどめる. 金額で小数点以下のxxは, 本稿で記載しない銭を意味する. 期末繰越金と前期からの繰越金は原則として総額に算入しなかった. そのために, 本稿における各月(期)の収入額と支出額は均衡しない. 第x回…決算書が複数月を含む場合には, まとめたまま示した場合もあるが, 可能なかぎり, 1月当たりの収支金額を示そうとした. おそらく決算日の都合から, ある月の決算書が2表に分割されている場合には常に, 1表にまとめた. ただし, ある月(期)の収支決算書に次の月(期)の収入額・支出額が計上されている場合には, 原表のままとし, その収入額・支出額を前の月(期)に移さなかった. さらに, 小さな紙片に手書きされた請求書・領収書が, レーマン関係資料に含まれる. その中の数枚は本節の関係個所で注記した.

(1) 1915年8月. 当月の収入=バラック第2号から第16号までの〈下士官・兵士〉収容所⁽²⁾からの募金45.85円; 舞台装置のためのロートの募金12.69円; 俳優のための下士官ボルマンの募金12.76円; 士官からの募金40.47円; 8月18日の〈オーストリア〉皇帝記念日の出費についてアンデルス少佐から5.22円; 8月18日の「劇団の夕べ」プログラム⁽³⁾9.00円; 8月18日の演奏会プログラム⁽⁴⁾3.05円; 音楽会プログラム19枚⁽⁵⁾1.90円; 「バラエティーの夕べ⁽⁶⁾」について(a)プログラム9.96円, (b)そのための募金の純益から20%を受け取り8.25円, (c)劇団俳優が純益の俳優分を寄付9.86円; など合計159.01円. 支出=舞台装置材料・緞帳(布地20メートルなど)27.40円; 舞台の組立(下士官ヴァイス)5.81円; 弦(レーマン, ナック)5.60円; 舞台用電灯12円; 舞台装置(ハリーア)6.16円; 8月18日の皇帝記念日のための出費5.22円; 共同作者・舞台製作労働者のためのビール14.96円; 材木購入(?)6.25円; 舞台画家(パウルゼンとヤーン)4円; 音楽基金への繰越金23.73円; 劇団基金への繰越金26.46円; など合計159.01円. この決算書の末尾には, 音楽基金と劇団基金とは収容所楽団の希望によって今後は分離され, 両者は上記の繰越金をそれぞれ受け取る, との追記がある.

(2) 1915年9月. 収入=演奏会プログラム, 入金5回⁽⁷⁾40.xx円; 「劇団の夕べ」3回⁽⁸⁾8.xx円; 「バラエティーの夕べ」1回⁽⁹⁾5.xx円; アンデルス少佐から弦・ヴァイオリンのために⁽¹⁰⁾66.xx円<; など合計124.xx円>. 支出=プログラム用と製図用の紙(2分の1)3.xx円; プログラムの図案家ホルシュタイン(3分の1)1円; 上海に電報17字5.xx円; 8人の団員に2円ずつ支払い⁽¹¹⁾16円; 弦(レーマン)8.xx円; チェロ弦(ハーケ)5.xx円; 楽団のためにナック(支払目的は不記載)6円; レーマンに誕生日⁽¹²⁾の贈り物として4円; 舞台用電球(2分の1)1.xx円; 弦39.xx円⁽¹⁰⁾; ヴァイオリン1丁27.xx円⁽¹⁰⁾; 繰越金25.xx円<; など合計148.xx円>.

(3) 1915年10月⁽¹³⁾(11月4日までを含む). 収入=演奏会プログラム3回⁽¹⁴⁾計33.xx円; 「劇団の夕べ」1回⁽¹⁵⁾5円<; など合計39.xx円>. 支出=弦25.xx円; 複写機(ナック)4円; 転写機(4人の退会者)1.xx円; 退会者レーマン, ゲーブハルト, ヴァイセンボルン, キューネへの支払い⁽¹⁶⁾26.xx円; 弓取り寄せ・修理4円; 繰越金(新しい基金)26.xx円<; など合計92.xx円>. 第3回決算書の支出の項に, 今後は写譜に対して算定される, と追記されている. また, 第4回決算書の末尾に, 11月4日に楽団の集会, 会計係として〈下士官〉A. ベルカー, との追記がある.

(4) 15年11月4日から16年7月1日まで⁽¹⁷⁾. 収入=〈演奏会〉プログラム販売9回⁽¹⁸⁾94.xx円; 「劇団」〈からの入金〉5回⁽¹⁹⁾22円<; など合計116.xx円>. 支出=弦など33.xx円; 共演者⁽²⁰⁾8人への支払16円; アスペック(楽器修理・

電機部品・プログラム用紙など) 12.xx 円; ナック (複写機など) 6 円; レーマン (プログラムの図案など) 5.xx 円; プログラム印刷者 1.xx 円; 紙 (兵士用酒保) 2.xx 円; リハーサルのために舞台を密閉 3 円; など合計 81 円。最後に、求めに応じて領収書は閲覧できる、との追記がある。

(5) 1916 年 7 月。収入＝演奏会プログラム 4 回⁽²¹⁾ 43.xx 円; アンデルス少佐から弦のために⁽²²⁾ 41.xx 円; など合計 84.xx 円。支出＝弦 (アンデルス少佐⁽²²⁾) 41.xx 円; フォン・ヘルトリック中尉⁽²³⁾ (ヴィオラ C 弦?) のために) 3 円; 印刷者・プログラム (販売者) などに 3.xx 円; 合計 49.xx 円。なお、7 月 20 日の収入の項に次の記事がある。下士官ペルカーが会計係を辞任した。資産、51.66 円が神戸の銀行にある。

(6) 1916 年 8 月⁽²⁴⁾。収入＝演奏会プログラム 3 回⁽²⁵⁾ 37.xx 円; オーストリア水兵のための演奏会⁽²⁶⁾ 55.xx 円; 「劇団の夕べ」1 回⁽²⁷⁾ 6 円; アンデルス少佐から弦のために 33.xx 円; など合計 132.xx 円。支出⁽²⁸⁾＝楽団の 11 人⁽³⁰⁾ に均等に 20.xx 円; 楽器修理 5.xx 円; アンデルスの弦会計支払⁽³¹⁾ 33.xx 円; オーストリア水兵への支払 49.xx 円; 17 日の演奏会のための出費 4.xx 円; 写譜 17.xx 円; 弦 (兵士用酒保⁽³²⁾) 5.xx 円; 写真 (ヴォルケンハウアー) 11 円; 複写機 (ナック) 10 円; など合計 164.xx 円。

(7) 1916 年 9 月。収入＝演奏会プログラム 4 回⁽³³⁾ 25.xx 円; 「劇団の夕べ」1 回⁽³⁴⁾ 6 円; 合計 31.xx 円。支出＝楽団員 11 人に均等に支払 35.xx 円; 写譜 5.xx 円; 紙 (プログラム用など) 5 円; エームンツ⁽³⁵⁾ 給与 0.5 円; 綴帳用の灰黄色布地 4.xx 円; 写譜 7.xx 円; <プログラム> 印刷者・販売者 5.xx 円; など合計 58.xx 円。

(8) 1916 年 10 月⁽³⁶⁾。収入＝演奏会プログラムあるいは演奏会 5 回⁽³⁷⁾ 31 円; 「劇団の夕べ」1 回⁽³⁸⁾ 4 円; 士官予約者 64 人からの入金⁽³⁹⁾ 32 円; アンデルス少佐から弦のために⁽⁴⁰⁾ 38.xx 円; など合計 105.xx 円。支出＝楽団員 11 人に均等に支払 42.xx 円; 弦会計支払⁽⁴⁰⁾ 38.xx 円; など合計 92.xx 円。

(9) 1916 年 11 月。収入＝演奏会 3 回⁽⁴¹⁾ 21 円; 「劇団の夕べ」1 回⁽⁴²⁾ 4 円; 士官予約者 65 人 26 円; フォン・シュトラント少佐⁽⁴³⁾ からヴァイオリンの胴のために 23.xx 円; 合計 74.xx 円。支出＝写譜 4.xx 円; 11 人に均等に支払 42.xx 円; ヴァイオリンの胴の材料 18.xx 円; ヴァイオリンの胴の労賃 5.xx 円; 印刷者 2.xx 円; <プログラム> 販売者への手数料) 2 円; プログラムの図案家に 1.xx 円; プログラム用画用紙 (東京) 2 円; など合計 80.xx 円。

(10) 1916 年 12 月。収入＝「演奏会と劇団」1 回⁽⁴⁴⁾ 15.xx 円; 士官予約者 18.xx 円; 合計 34 円。支出＝<団員への> 支払⁽⁴⁵⁾ 34.50 円; など; 合計 44.xx 円。

(11) 1917 年 1 月。収入＝士官予約者 6.xx 円; <士官以外> 収容所での切符販売 31.xx 円; 切符販売・士官 1.xx 円; 合計 39.xx 円。支出＝絵葉書 (日本<人?>) に支払) 20 円; プログラム用紙 5 円; <団員への> 支払⁽⁴⁶⁾ 22.95 円; など合計 50.xx 円。

(12) 1917 年 2 月。収入＝「劇団の夕べ」1 回⁽⁴⁷⁾ 4 円; など合計 4.xx 円。支出＝合計 0.50 円。

(13) 1917 年 3 月⁽⁴⁸⁾。収入＝「劇団の夕べ」1 回⁽⁴⁹⁾ 4 円; 合計 4 円。支出＝<合計 0 円>。

(14) 1917 年 4 月。収入＝演奏会 3 回⁽⁵⁰⁾ 24.xx 円; 「劇団」1 回⁽⁵¹⁾ 4 円; など合計 30.xx 円。支出＝<プログラム> 謄写用麻布 3 ヤード 4.xx 円; A 弦 (兵士用酒保) 1.xx 円; 舞台用のプリキ板 3.xx 円; など合計 10.xx 円。

(15) 1917 年 5 月。収入＝演奏会 2 回⁽⁵²⁾ 13.xx 円; 「劇団」1 回⁽⁵³⁾ 4 円; 士官予約者 19.xx 円; など合計 36.xx 円。支出＝9 人⁽⁵⁴⁾ に均等に支払 35.xx 円; 写譜 4.xx 円; プログラム印刷者 2.xx 円; 2 人のプログラム図案家 2 円; など合計 49.xx 円。

(16) 1917 年 6 月。収入＝演奏会 4 回⁽⁵⁵⁾ 22.xx 円; 「劇団の夕べ」1 回⁽⁵⁶⁾ 4.xx 円; 士官予約者 12.xx 円; 合計 39.xx 円。支出＝8 人⁽⁵⁷⁾ に均等に支払 25.xx 円; プログラム用紙 4.xx 円; など合計 35.xx 円。

(17) 1917 年 7 月。収入＝演奏会 5 回⁽⁵⁸⁾ 29.xx 円; 「劇団」1 回⁽⁵⁹⁾ 4.xx 円; 士官予約者 31.xx 円; 合計 65 円。支出＝パウルゼン宛 1 円; ヘッケビュッカー⁽⁶⁰⁾ 宛 3.xx 円; 8 人に均等に 45.xx 円; 下士官エベ宛 2.xx 円; 写譜 2.xx 円; プログラム販売者 2.xx 円; インク (上海) 3 円; プログラム用紙 4 円; A 弦 (兵士用酒保) 1.xx 円; など合計 67.xx 円。

(18) 1917 年 8 月。収入＝演奏会 2 回⁽⁶¹⁾ 4.xx 円; 士官予約者 25.xx 円; など合計 30.xx 円。支出＝写譜 (レーマン, ゲープハルト, キューネ) 2.xx 円; 10 人⁽⁶²⁾ に均等に支払 33 円; 印刷者 2.xx 円; 画家パウルゼンなど 2 人 1 円; など合計 44.xx 円。

(19) 1917 年 9 月。収入＝演奏会 4 回⁽⁶³⁾ 9.xx 円; 「劇団」1 回⁽⁶⁴⁾ 6 円; 士官予約者 64 人 12.xx 円; 下士官予約者 8.xx 円; など合計 37.xx 円。支出＝10 人に均等に 22 円; 謄写用麻布 (イエーネルトから買い入れ) 3 円; など合計 30.xx 円。

(20) 1917 年 10 月。収入＝演奏会 4 回⁽⁶⁵⁾ 9 円; 士官予約者 63 人 25.xx 円; 下士官予約者 14.xx 円; など合計 49.xx 円。支出＝プログラム用紙 2.xx 円; 写譜 (レーマン, ゲープハルト, ニチュケ?) 2.xx 円; 10 人に均等に支払 38 円; ヴァイオリン G 弦 (兵士用酒保) 1.xx 円; 印刷者 2.xx 円; ピアノとハルモニウムの担当者に 2 円; 日本の装置(?) のための頼引紙 2.xx 円; など合計 56.xx 円。

(21) 1917 年 11 月。収入＝演奏会 3 回⁽⁶⁶⁾ 8.xx 円; 「劇団」1 回⁽⁶⁷⁾ 6 円; 士官予約者 24.xx 円; 下士官予約者 16.xx 円;

楽団の写真に関してレーマンから14.xx 円<; など合計70.xx 円>。支出=Lehm.⁽⁶⁸⁾のための楽団の写真10枚2 円; 印刷者(ヘッケンビュッカー, シュルツェ) 2.xx 円; 写譜(レーマン, ゲープハルト) 1.xx 円; 10人に均等に支払40円; 楽団の写真2 枚(クナウフ) 0.40円; 楽団の写真44枚(ザントフォス⁽⁶⁹⁾) 8.xx 円; レーマンの写真(同人) 5.xx 円<; など合計67.xx 円>。

(22) 1917年12月。収入=演奏会3 回⁽⁷⁰⁾ 6.xx 円; 「劇団」1 回⁽⁷¹⁾ 4 円; 士官予約者18.xx 円; 下士官予約者10.xx 円<; など合計39.xx 円>。支出=印刷者(シュルツェ) 1.xx 円; 10人に均等に支払32円<; など合計36.xx 円>。

(23) 1918年1 月。収入=士官予約者62人18.xx 円; 下士官予約者15.xx 円; <兵士> 収容所の予約者(ゲープハルト) 5.xx 円<; 合計39.xx 円>。支出=10人に均等に支払43.xx 円; 写譜(レーマン) 1 円; 印刷者(シュルツェ) 1.xx 円<; など合計49.xx 円>。

(24) 1918年2 月。収入=「劇団」1 回⁽⁷²⁾ 4 円<; 合計4 円>。支出=0 円。

(25) 1918年3 月。収入=演奏会1 回⁽⁷³⁾ 4.xx 円<; 合計4.xx 円>。支出=合計1.xx 円。

(26) 1918年4 月。収入=演奏会3 回⁽⁷⁴⁾ 12.xx 円; 「劇団」2 回⁽⁷⁵⁾ 8 円; 士官予約者13.xx 円; 下士官予約者24.xx 円<; など合計60.xx 円>。支出=プログラム用紙2.xx 円; 印刷者・図案家パウルゼン2.xx 円; アンドレ? (支払目的不記載) 2.xx 円; プログラム販売(ゲープハルト) 2.xx 円⁽⁷⁶⁾; 写譜(レーマン, ヴァイセンボルン) 2.70円⁽⁷⁷⁾<; など合計13.xx 円>。

(27) 1918年5 月。収入=演奏会4 回⁽⁷⁸⁾ 17.xx 円; 「劇団」1 回⁽⁷⁹⁾ 4 円; ヴェルナーのための…埋葬音楽⁽⁸⁰⁾ 10円; 下士官予約者(ニチュケ) 15円; 士官予約者(レーマン) 23.xx 円; <兵士> 収容所の予約者(ゲープハルト) 4.xx 円; 綴帳に関して留保5 円<; など合計74.xx 円>。支出=10人に均等に支払99円; ピアノ担当者6 人⁽⁸¹⁾ 2.xx 円; パウルゼン2.xx 円; アンドレ? 2 円; 写譜(レーマン, ニチュケ, ヘック, ヴァイセンボルン, ゲープハルト) 5.xx 円; 綴帳10円; プログラム<販売>(ゲープハルト, レーマン, ニチュケ); 観客席清掃⁽⁸²⁾ 0.60円; 合計5.xx 円<; など合計128.xx 円>。

(28) 1918年6 月。収入=演奏会5 回⁽⁸³⁾ 23.xx 円; 「劇団」1 回⁽⁸⁴⁾ 4 円; 綴帳基金10円; 士官予約者30円; 下士官予約者20.xx 円; <兵士> 収容所の予約者2 円<; など合計89.xx 円>。支出=写譜(レーマン) 1.xx 円; プログラム販売(ゲープハルト, ニチュケ, レーマン) 6.xx 円; 綴帳基金10円; 団員10人への支払60円<; など合計89.xx 円>。

(29) 1918年7 月。収入=演奏会4 回⁽⁸⁵⁾ 12.xx 円; 士官予約者23.xx 円; 下士官予約者18.xx 円; <兵士> 収容所の予約者6 円<; など合計59.xx 円>。支出=プログラム用紙4.xx 円; プログラム販売(ゲープハルト, ニチュケ [下士官], レーマン [士官]) 5.xx 円; ヴァイオリン修理(ナック) 1.xx 円; 習志野への出発に際してアスペック⁽⁸⁶⁾に支払4 円; 収容所楽団団員9 人に均等に39.xx 円<; など合計59.xx 円>。

(30) 1918年8 月。収入=演奏会4 回⁽⁸⁷⁾ 9.xx 円; 「劇団」1 回⁽⁸⁸⁾ 4 円; 士官予約者20円; 下士官予約者10.xx 円; <兵士> 収容所の予約者2.xx 円<; など合計47円>。支出=パウルゼン(印刷者・図案家) 2.xx 円; エームンツ(楽団用務員) 2 円; プログラム販売(ゲープハルト, レーマン, ニチュケ) 4.xx 円; 写譜(レーマン, ヴァイセンボルン) 1.xx 円; レーマン(譜本製本者シャウム) 5 円; 10人に均等に支払28円<; など合計47.xx 円>。

(31) 1918年9 月。収入=9 月8 日入金の演奏会98.xx 円⁽⁸⁹⁾; その他の演奏会4 回⁽⁹⁰⁾ 14.xx 円; 「劇団」1 回⁽⁹¹⁾ 4 円; 士官予約者20円; 下士官予約者11.xx 円<など>; 合計148.xx 円>。支出=楽団第100回演奏会記念昼食会51.xx 円; パウルゼン5 円; プログラム用紙11.xx 円; プログラム販売(ゲープハルト, レーマン, ニチュケ) 5 円; 写譜(レーマン⁽⁹²⁾) 0.35 円; 10人に均等に支払70円<; など合計148.xx 円>。

(32) 1918年10月。収入=演奏会4 回⁽⁹³⁾ 14.xx 円; 「劇団」1 回⁽⁹⁴⁾ 4 円, 士官予約者19.xx 円; 下士官予約者10.xx 円; <兵士> 収容所の予約者10.xx 円; 音楽基金積立金10円; 合計69.xx 円。支出=音楽基金積立金7.xx 円; 10人に均等に支払45円; パウルゼン3 円; <プログラム(ゲープハルト, レーマン, ニチュケ)> 4.xx 円; 写譜1.xx 円<; など合計68.xx 円>。

(33) 1918年11月。収入=演奏会0 回⁽⁹⁵⁾ 0 円; 「劇団」2 回⁽⁹⁶⁾ 8 円<; 合計8 円>。支出=<0 円>。

(34) 1918年12月。収入=演奏会3 回⁽⁹⁷⁾ 9.xx 円; 展覧会20円<; など合計30.xx 円>。支出=<合計1.xx 円>。

(35) 1919年1 月。収入=演奏会1 回⁽⁹⁸⁾ 1.xx 円; 士官予約者19.xx 円; 下士官予約者10.xx 円<; など合計34.xx 円>。支出=石炭2.xx 円; 積立金5.xx 円; 10人に均等に支払60円<; など合計79.xx 円>。

(36) 1919年2 月から4 月21日まで。収入=演奏会4 回⁽⁹⁹⁾ 35.xx 円; 「劇団」3 回⁽¹⁰⁰⁾ 18円; 士官予約者12.xx 円; 下士官予約者5.xx 円<など>; 合計76.xx 円>。支出=蝶形結びのリボン? (ハーケ) 8.xx 円; 第16号バラック電灯費(ピーパー, 3 月3 日) 3.xx 円; 写譜(レーマン, キューネ) 3.xx 円; プログラム<販売>(レーマン, ニチュケ) 3 円; パウルゼン3 円; 9 人⁽¹⁰¹⁾に均等に支払38.xx 円; 退団するヴィルヘルム⁽¹⁰²⁾に, 演奏会2 回分として2.xx 円<; など合計77.xx 円>。

(37) 1919年4 月22日から5 月まで。収入=演奏会4 回⁽¹⁰³⁾ 22.xx 円; 「劇団」1 回⁽¹⁰⁴⁾ 5 円; 士官予約者23.xx 円; 下士官予約者13.xx 円; <兵士> 収容所<の予約者> 12.xx 円<; など合計80.xx 円>。支出=プログラム(ゲープハルト,

レーマン、ニチュケ) 5.xx 円; 第16号バラック電灯費・維持費(5月5日) 1.xx 円; 10人⁽¹⁰⁵⁾に均等に支払57円<; など合計80.xx 円>。

(38) 1919年6月。収入=演奏会5回⁽¹⁰⁶⁾22.xx 円; 「劇団」1回⁽¹⁰⁷⁾4 円; ; 士官予約者50人25円; 下士官予約者11円<; など合計62.xx 円>。支出=パウルゼン(紙・印刷者) 4.xx 円; プログラム<販売>(ゲーブハルト, レーマン, ニチュケ) 6 円; 写譜(レーマン, クナウフ) 1.xx 円; 10人に均等に支払44円<; など合計62.xx 円>。

(39) 1919年7月。収入=演奏会4回⁽¹⁰⁸⁾14.xx 円; 「劇団」1回⁽¹⁰⁹⁾4 円; ゲーブハルト (<兵士> 収容所<の予約者>) 9.xx 円<; など合計29.xx 円>。支出=0 円。

(40) 1919年8月。収入=演奏会4回⁽¹¹⁰⁾18.xx 円; 「劇団」1回⁽¹¹¹⁾4 円; 士官予約者50人20円; ゲーブハルト<兵士予約者> 11.xx 円<; など合計53.xx 円>。支出=観覧席清掃2 円; 合計2 円。

(41) 1919年9月。収入=演奏会3回⁽¹¹²⁾10.xx 円; 「劇団」1回⁽¹¹³⁾4 円; 士官予約者50人20円; 下士官予約者13.xx 円; ナックの受取辞退5 円(8 円中3 円だけを受け取る); プログラム<, 兵士> 収容所(ゲーブハルト) 2 円<; など合計55.xx 円>。支出=10人に均等に支払80円; プログラム用紙3.xx 円⁽¹¹⁴⁾; 印刷者4.xx 円; プログラム販売(ゲーブハルト, キューネ, レーマン, ニチュケ) 11円; 写譜(レーマン [2.xx 円], ヘック, ペシユテル, クナウフ, ゲーブハルト) 6.xx 円; 楽団用務員エームンツ4 円; ヴァイセンボルン(未回収プログラム<代金>の10%) 3.xx 円; 五線紙(ビーバー) 1.xx 円<; など合計119.xx 円>。

(42) 1919年10月。収入=演奏会5回⁽¹¹⁵⁾25.xx 円; 「音楽会付き劇団」1回⁽¹¹⁶⁾10円; 士官予約者14.xx 円; <コントラ> バス募金の残余(=積立金⁽¹¹⁷⁾) 48.xx 円; 積立金5.xx 円<; など合計107.xx 円>。支出=写譜(退団するクナウフに) 5 円<; など合計8.xx 円>。

(43) 1919年11月。収入=演奏会3回⁽¹¹⁸⁾19.xx 円; 士官予約者16.xx 円; 下士官予約者(9-10月分) 19.xx 円; <兵士> 収容所<の予約者>(ヴァイセンボルン) 17.xx 円; 出費積立金から30円; 積立金残高24.xx 円<; など合計104.xx 円>。支出=写譜(レーマン [4.xx 円], ペシユテル, ヘック, ゲーブハルト, ヒューン) 5 円; プログラム<販売>(ゲーブハルト, キューネ, レーマン, ニチュケ) 10.xx 円; 出費積立金30円; 11月2日の演奏会のために5.xx 円; 9人⁽¹¹⁹⁾に均等に支払112.xx 円; 11月11日の積立金残高24.xx 円; 製本(シャウム⁽¹²⁰⁾) 3 円; 五線紙2 円<; など合計210.xx 円>。

(44) 1919年12月。収入=演奏会3回⁽¹²¹⁾23.45円; 「劇団」2回⁽¹²²⁾14円; 繰越金39.65円; 士官予約者15.60円; 下士官<予約者> 6.80円; <兵士> 収容所<の予約者> 14円; 合計113.50円<繰越金を除く当月収入合計73.85円>。支出=弦3 円; 五線紙3.76円; 第16号バラック電灯料4.38円(12月1日); 写真(ヴォルケンハウアー) 10.16円⁽¹²³⁾; プログラム<販売>(ゲーブハルト, ニチュケ, レーマン) 9 円; パウルゼン(紙・印刷者) 5.50円; 写譜(レーマン [1.57円], ヒューン, ヴァイセンボルン) 5.07円; エームント<=エームンツ> 4 円; 紙(ヴァックスマン) 3.50円; 9 人に均等に支払58.50円<; など支出合計108.15円>。

ここに紹介した収容所楽団収支決算書から次の事実が明らかになる。第1に、第1回決算書の最初の項目は1915年8月7日に、ごく少額の支出として記帳された。この日付は、レーマン主宰楽団の第1回プロムナード・コンサートが開かれてから、2月近く後に当たる。そして、決算書は収容者の大量解放の直前、1919年12月23日でもって閉じられた。これらの決算書は、最初期の2ヶ月を除けば、収容所楽団の活動の全期間に及び、中断がない。第2に、収容所楽団の演奏会は1915年8月18日に初めて決算書に記録された。最後のそれは1919年12月23日の第145回=最終演奏会であった。ただし、第137回と第138回の間に第137a回が挟まっているので、演奏会の合計は146回となるであろう。その間に、プログラムがまだ発見されていない、多くの演奏会の年月日が記録されている。また、発見されたプログラムが演奏会の楽団名を明示していない場合でも、その期日が決算書記載の期日と合致するならば、収容所楽団の演奏が確定されうる。第3に、第3回音楽基金決算書と第4回決算書の表題によれば、旧収容所楽団は1915年10月21日に解散し、同年11月4日に新収容所楽団が編成された。旧楽団の会則は不明である。新楽団は本稿第1節(1)の楽団規約案に依拠して組織されたであろう。第4に、旧・新の収容所楽団はいくらかの報酬を団員に支払った。支払は1915年9月に始まり、決算書の最終日まで断続的に行なわれた。第5に、1915年9月の旧楽団の団員は8人であった。旧楽団から移った、レーマンなど4人を含めて、同年11月初めに新楽団は9人で発足したであろう。団員は1916年4月に8人、同年8月に11人、同年12月におそらく10人、1917年5月に9人、同年6月に8人、同年8月に10人、1918年7月に9人、同年8月に10人、1919年4月に9人、同年6月に10人、同年11-12月に9人であった。この楽団団員数は本稿第1節(2)の楽団団員名簿の21人よりも遙かに少ない。それは、展覧会案内書 1918などに述べられ、「レーマンの楽団」と称されてきた写真に撮影された13人にさえ達しない。写真の13人ないし楽団団員名簿の21人は非正規団員を含むのであろう。それに対して、上記の8-11人は、必ずしも定期的ではないが、ともかくも報酬を楽団から受け取る、正規の団員であった、と考えられる。第6に、写譜謝金の一部の紹介を本節では省略したが、楽団のための写譜に関して最も貢献したのは、レーマンであった。第7に、1915年9月を最初と

して、収容所劇団はその公演の度毎に収容所楽団にはぼ定額を支払った。それに対して収容所楽団は、演奏会を開いても、劇団への支出をまったく計上していない。これは何を意味するのであろうか。劇団の公演プログラムには、前奏曲のような、収容所楽団の付随音楽が稀には予告されている。劇団の公演は収容所楽団の演奏を伴っており、そのために劇団は楽団に謝礼を支払ったのであろうか。1915年9月の決算書は、楽団が劇団の2回の公演から収益の10%を、1回の公演では15%を受け取った旨、記している。こうした取り決めがその後も存続したのであろうか。

いずれにせよ、この収支決算書は、収容所楽団の活動（一部は収容所劇団の公演活動を含む）と構成を資金面から明らかにする、第一級の資料である。

（注1）これは15年の誤記であろう。第4回決算書の終期も第5回決算書の始期も15年11月4日であるからである。

（注2）15のバラックのうち、第2号が最も少なく、0.56円で、第10号が最も多く、6.75円であった。第1号バラックからの募金はなかった。したがって、ここは居住者を持たず、士官食堂として使用されていた、と考えられる。第7号と第8号のバラックからの募金はかなりの金額に上った。そのために、両バラックはそれぞれ独立して機能していたであろう。これら2点は1919年秋の事情（本稿第3節（Ⅱ）(1)のコントラバス募金を参照）と異なる。

（注3）これは8月18日に入金した。津村 2000, p.36; 久留米収容所 2003, pp.48, 86によれば、収容所劇団は同日に公演した。したがって、公演日と音楽・演劇基金への入金日が一致している。この日のプログラムは発見されている。収容所劇団は笑劇、「シュプレー川沿いのアテネっ子たち」あるいは「ベルリンっ子」を上演した。——以下では、演奏会・劇団公演プログラムが発見されている場合（プログラムあり、と略記する）も、未発見の場合（プログラム未発見と略記）も、津村 2000, pp.36-38; 久留米収容所 2003, pp.47-84, 86-88の参照箇所を原則として示さない。

（注4）これ（前注の収容所劇団との共催）は8月18日に入金した。したがって、演奏会開催日（プログラムあり）と入金日が一致している。ただし、久留米収容所 2003, p.48は「収容所楽団（指揮バハシュタイン）」と表現している。これの問題点は松尾 2003(a), 第2節（Ⅲ）（注5）を参照。

（注5）この少額の入金は8月15日に記帳されているが、音楽会の日付は記載されていない。この日の楽団プログラムも発見されていない。この売上金は8月18日の音楽会プログラムの前売金ではなかろうか。

（注6）この開催日は決算書に記されていない。入金は8月25日である。同日の「バラエティーの夕べ」（プログラムあり）は劇団の笑劇を含んでいた。また、レーマン楽団が共演すること、入場無料のこの催しで出演者と音楽・劇団基金への募金が行なわれること、がプログラムに印刷されている。

（注7）プログラム代金は5回に分けて入金した。そのうち、決算書から見て、8月2日と19日には演奏会が開かれた。プログラム未発見。

（注8）このうち9月2日と30日の入金は〈収容所〉劇団の収益の10%、15日の入金は同15%とされている。2日の入金は1日の劇団公演に、30日の入金は29日のそれ（両日のプログラムあり）に基づくものであろう。

（注9）9月11日に収益の15%が音楽基金に入金した。当日あるいは直前の劇団公演プログラムは未発見。

（注10）アンデルスの寄付による収入と、それに基づく支出は9月ではなく、10月26日付である。これに関連する手書き紙片がレーマン関係資料の中にある。アンデルス少佐（〈ジーメンス会社〉ドレンクハーン）から1915年9月5日に弦などを受け取ったこと、また、弦楽器部品各種・五線紙の数量（金額はない）と合計金額39.xx 円が記されている。なお、アンデルス名義の寄付は本節(1)の1915年8月以後、しばしば記入されている。これは彼個人の寄付ではなく、久留米の先任将校としての彼が日本内外からの捕虜救援資金を仲介したのであろう。板東収容捕虜への救援資金については、富田 1991, pp.33-34, 131-139; 林 1993, pp.84-85; 板東収容所 2000, pp.29-32を参照。

（注11）団員への報酬に関するこの記事から、正規の団員が8人であったこと、また、楽団規約案第4条に記されているように、全員への支給額が同一であったこと、が判明する。

（注12）9月22日支出。松尾 2003(a), 第3節(1)の出生証明書が示すように、レーマンは9月22日に生まれた。

（注13）これは、1915年10月の旧楽団解散時の第3回音楽基金決算書と、10月21日の旧楽団の解散から11月4日の新楽団の編成までの第4回決算書の数字の合計である。

（注14）これは10月3日と10日の「演奏会プログラム」および15日の「プログラム＝演奏会」である。いずれもプログラム未発見。

（注15）これは10月13日の収入である。同日の劇団プログラムあり。

（注16）この記事によれば、レーマン、ゲーブハルト、ヴァイセンボルン、キューネの4人が旧収容所楽団から退団し、数人（楽団規約案によれば5人）を加えて、新しい収容所楽団を結成したのであろう。

（注17）これは第5回音楽会計決算書である。約8ヶ月が一括して、計上されている。

（注18）1915年11月22日、11月28日、12月5日、12月12日、1916年4月25日、4月、5月、6月11日、6月18日の9回に入金。1915年12月5日と12月12日については収容所楽団のプログラムあり。1916年4月23日と6月11日についても、ポ

ビュラーな曲目の演奏会プログラムが発見されているので、収容所楽団が演奏したであろう。

(注19) 1915年12月29日, 1916年3月(2回), 4月26日, 5月の5回に入金。12月, 3月(2回), 5月については劇団プログラムあり(ただし, 日付は不明)。4月26日の入金, 同月23日の公演(劇団プログラムあり)に伴うものであろう。

(注20) 共演者は収容所楽団団員を意味するであろう。支払は16年4月14日に行なわれた。当時の団員は8人だったと考えられる。

(注21) 7月9日, 16日, 23日, 31日の4回である。23日の楽団プログラムのみあり。

(注22) これについての手書き紙片がレーマン関係資料の中にある。アンデルス少佐から1916年7月12日に弦などを受けた(?)こと, 弦楽器部品各種と五線紙の数量・価格および合計金額41.xx 円が記されている。

(注23) 楽団団員名簿で第1ヴァイオリン奏者とされているヘルトリンクは, 俘虜名簿では中尉ではなく, 少尉である。ただし, 彼が収容所楽団に入団したのは, 1919年7月であろう。本節(注108)を参照。

(注24) 以後の決算書は月毎の収支合計をしばしば示さない。

(注25) 8月6日, 13日, 27日の演奏会である。27日の楽団プログラムあり。

(注26) これは8月17日に入金した。本稿第3節(Ⅱ)(4)の記念音楽会も同日に開かれた。したがって, 音楽会開催日と入金日は同じである。楽団プログラムあり。

(注27) 入金は8月18日である。この日の劇団プログラムは未発見。

(注28) 収入の項(日付なし)に, 楽団は写譜のために2円を受け取る, との文章が記されている。ただし, この金額は楽団の収入に加算されていない。

(注29) レーマン関係資料の中の, 五線紙に手書きされた1枚が, この月に支出に関連する。写譜のためにレーマン(7.xx 円)など7人に, 楽器修理のためにグレーナー(3円, 16年8月8日受取)など4人に支払われた。写真は51枚であった。

(注30) これが記帳された8月2日には, 団員数が11人となっていたわけである。

(注31) これについての手書き紙片がレーマン関係資料の中にある。アンデルス・シュートランツ・ドレンクハーンから1916年8月8日(33.xx 円)と10日に弦などを受けたこと, 弦楽器部品各種が記されている。ただし, 音楽会計決算書は8日受取分を記載しているが, 8円余りの10日受取分を含まない。

(注32) 兵士用酒保からの弦買い入れは以後, 時折り記載されている。

(注33) 9月3日, 10日, 17日, 24日である。楽団プログラムはいずれも未発見。

(注34) 9月2日の入金である。9月の劇団プログラム(期日不明)あり。

(注35) 楽団用務員エームツへの支払は以後しばしば記帳されている。

(注36) これは, 第6回音楽会計決算書の最後の部分(10月2日まで)と第7回音楽会計決算書の最初の部分(同月3日から月末まで)との合計である。

(注37) 本稿第3節(Ⅳ)(2)を参照。

(注38) 10月1日, 8日, 15日, 22日, 29日である。15日以後は単に演奏会とされている。これらの楽団プログラムは未発見。

(注39) 10月6日の入金である。この日の劇団プログラムあり。

(注40) これに関する手書き紙片がレーマン関係資料の中にある。〈ジューメンス会社〉ドレンクハーンおよびヴェルクマイスター(本稿第3節(Ⅰ)(注1)を参照)を通じて, シュートランツ少佐から1916年10月20日に弦などを受けたこと, 弦楽器部品各種が記されている。明細書の金額38.xx 円は, 1916年10月の決算書(8)の弦会計支払額およびアンデルス少佐からの受取額と一致する。

(注41) 11月5日, 12日, 19日である。12日のプログラム(楽団名なし)だけあり。

(注42) 11月8日の入金である。劇団プログラム未発見。

(注43) フォン・シュートランツはここで少佐とされているが, 日本側資料では大尉であった。彼について本稿第6節(注3)を参照。

(注44) 12月25日の入金である。この日の劇団・収容所楽団共催のプログラムはあるが, 第2部の劇団「クリスマスツリーの下で」が久留米収容所 2003, p.86に記載されているだけである。松尾 2003(a), 第2節(Ⅱ)(注21)(iv)を参照。

(注45) これが楽団員への報酬であるとする, この金額は, 団員を先月の11人ではなく, 10人と想定してのみ, 割り切れる。

(注46) この金額も11人では割り切れず, 団員10人とした場合に, 5厘の端数を付けて, 辛うじて割り切れる。

(注47) 2月28日付の入金である。劇団のプログラムあり。

(注48) レーマン関係文書の中に, 関連する手書き紙片がある。1916年12月15日にフォン・シュートランツ少佐を通じてドレンクハーンに発注したこと, 弦楽器部品の名称・数量と受領日1917年3月5日が記されている。しかし, これは3月の

決算書に記録されていない。

- (注49) 3月24日付の入金である。劇団プログラムあり。
- (注50) 4月8日、22日、29日に行なわれた。8日は復活祭音楽会である。発見されたプログラムのうち、月末の演奏会は29日ではなく、28日とされている。8日の楽団名は不記載、22日のプログラムは未発見。
- (注51) 4月24日の入金である。4月の劇団プログラムには2演目が並んでいる。
- (注52) 5月20日と27日（聖霊降臨祭記念）である。楽団プログラムはいずれも未発見。
- (注53) 5月28日入金。注記された「アリバイ」は、演目を示すであろう。劇団プログラム未発見。
- (注54) 団員は9人に減少した。
- (注55) 6月3日、10日、17(19)日、24日である。これらの楽団プログラムは未発見。
- (注56) 6月28日入金。「白馬亭にて」の注記あり。劇団プログラム未発見。
- (注57) 団員は8人に減少した。
- (注58) 7月1日、8日、15日、27日、29日である。いずれも楽団プログラム未発見。
- (注59) 7月13日の入金であり、「私が戻ったとき」の注記がある。劇団プログラムあり。
- (注60) これはヘッケビュッカーとしか読めない。しかし、この年の11月には印刷者ヘッケンビュッカー宛の支出が記録されている。俘虜名簿は後者しか記載していない。
- (注61) 8月12日、26日であった。楽団プログラム未発見。
- (注62) 団員数が10人に戻っている。
- (注63) 9月2日、9日、16日、30日であった。楽団プログラム未発見。
- (注64) 9月13日の入金であった。9月11日「罰としての休暇」の注記がある。同月の劇団プログラムあり。
- (注65) 10月7日、14日、21日、28日である。14日は「大演奏会」と記されている。同日の支出にピアノとハルモニウムの奏者への支払が記載されている。彼らが参加したために、大演奏会と称されたのであろう。——14日の楽団プログラムのみあり。プログラムにおける「補強」の文言から報告書は管楽器の補充を想定している。
- (注66) 11月4日、11日、18日である。楽団プログラム未発見。
- (注67) 11月1日の入金に、「10月18日」の注記がある。劇団の10月公演プログラム（日は不明）あり。
- (注68) これはレーマンと推定される。
- (注69) この最後は vos と読める。しかし、俘虜名簿では voss である。
- (注70) 12月2日、9日、25日である。2日のものには「第75回」の注記がある。2日の楽団プログラムだけあり。
- (注71) 12月12日入金。「11月23日」の注記がある。11月23日の劇団プログラムあり。
- (注72) 2月2日入金。1月27日の〈ドイツ〉皇帝生誕記念日のために1月31日に上演、の注記あり。劇団プログラム未発見。
- (注73) 3月31日の復活祭の音楽会である。同日のプログラムあり（楽団名なし）。
- (注74) 4月7(14)日、21日、28日であった。カッコ内の日付は、順延された日であるかもしれない。7日（楽団名推定）、21日（楽団名推定）、28日（楽団名を欠く）のプログラムあり。
- (注75) 4月1日と18(20)日の入金。1日は「劇団の夕べ」で、「ドクイットの」小都市市民」の、18(20)日は「劇団」で、「フラックスマン」の、注記あり。1日と18日の劇団プログラムあり。
- (注76) 「5月9日支払」および「203枚」の注記あり。プログラム販売手数料が1枚1銭であったのであろう。
- (注77) 「648行」の注記あり。したがって、1行が0.4銭余りであった。
- (注78) 5月5日、13日、19日（聖霊降臨祭演奏会）、26日である。いずれも楽団プログラムあり。ただし、13日は12日とされている。
- (注79) 5月16(17)日の入金で、「クラブチェアに座って」の注記あり。18日の劇団プログラムあり。
- (注80) 5月8日である。ただし、埋葬音楽の前の2単語は判読できない。
- (注81) 5月19日の支出である。同日の演奏会の共演者への謝金であろう。
- (注82) 以後この名目の支出が時に現れる。
- (注83) 6月2日、9日、16日、23(24)日、30日である。いずれも楽団プログラムあり。
- (注84) 6月28日入金。劇団プログラムあり。
- (注85) 7月7日、14日、21日、28日である。いずれも楽団プログラムあり。
- (注86) アスペックは1918年8月初めに習志野に移された。収容俘虜 1918。
- (注87) 8月4日、11日、18日、25日である。いずれも楽団プログラムあり。
- (注88) 8月7(8)日で、「同僚クランプトン」の注記あり。この演目について7月29日の劇団プログラムあり。
- (注89) 第100回演奏会による9月8日の入金の内訳は、第1号から第16号までのバラック（ただし、第8号はない）36。

xx 円, 士官の募金36円, デティエンスの募金21.xx 円, コルビンとデティエンスからの寄付4円であった。なお、ここではデティエンス(De)と書かれているが、俘虜名簿ではディティエンス(Di)となっている。同日の楽団プログラムあり。

(注90) 9月1日, 15日, 22日, 29日(10月1日)であった。すべて楽団プログラムあり(ただし、29日でなく、28日[合唱団と共催])。

(注91) 9月26日入金(「チャーリーの叔母」の注記あり)。9月11日の劇団プログラムあり。

(注92) 7ページ分である。したがって、1ページ当たり5銭となる。この金額は、楽団規約案から見ると、大型判の楽譜に相当する。

(注93) 10月7(6)日, 13日, 20日, 17日であり、第104回から第107回までである。ただし、第107回の17日は27日の誤記であろう。6日, 13日, 20日, 27日の楽団プログラムあり。

(注94) 10月9(8)日入金(「二つの条件」の注記あり)。8日の劇団プログラムあり。

(注95) 決算書では演奏会0回であるが、11月3日の楽団プログラムが発見されている。これはいかに理解されるべきであろうか。

(注96) 11月4日と30日に入金。前者には「ビーバーの毛皮」、後者には「無分別」の注記がある。1日と29日の劇団プログラムあり。

(注97) 12月1日, 8日, 25日の第108回から110回までである。25日については、初めて「B. [バラック] 第16号において」の注記がある。8日, 25日のプログラムあり。プログラムが発見された、26日の演奏会は、収容所楽団のそれとされている。久留米収容所 1999, p.61; 久留米収容所 2003, p.68。しかし、これは室内楽と歌曲の演奏会であった。

(注98) 1月5日の第111回である。楽団プログラムあり。1月19日については、363の(注99)を参照。

(注99) 1月19日, 2月16日, 4月6日, 4月20日, 第112回から第115回までである。すべて楽団プログラムあり。4月27日については、377の(注103)を参照。

(注100) 2月6(10)日, 3月21日, 4月11日である。2月6(10)日の入金には、「トーニ、6日から8日まで3回上演」の、4月11日の入金には、「信仰と故郷」の注記あり。2月6日, 3月28日, 4月8-10日の劇団プログラムあり。

(注101) 団員9人に1919年4月支払。

(注102) 1915年の久留米には3人のヴィルヘルムがいた。その中のヤーコブは1918年8月に板東に移された。収容換俘虜 1918. 俘虜番号3806の海兵・砲兵中隊下士官(ドイツ海軍官階表の二等需品掛兵曹からの類推)のカルル(Karl)は、久留米を動かなかった。それに対して、3785の海兵第4中隊二等兵カルル(Carl)は1917年6月よりも後に久留米から習志野に移され、宣誓解放された。俘虜名簿 1917, p.65。対独講和会議の進展に伴ってエルザス出身者が解放されることになった。それは板東収容所では1919年6月に実施された。富田 1991, p.162; 林 1993, p.43; 板東収容所 2000, p.76。後者のカルル・ヴィルヘルムは収容換俘虜 1918に含まれず、久留米から習志野への移動の時期は不明である。そのために、1919年4月に収容所楽団を退団したカルル・ヴィルヘルムが、下士官か二等兵かは確定できない。

(注103) 4月27日, 5月4日, 18日, 25日で、第116回から第119回までであった。5月4日には「合唱」の、18日には「合唱; 観客席清掃」の注記あり。楽団プログラムあり。

(注104) 5月12日の入金(「魔術師」の注記あり)である。10日の劇団プログラムあり。

(注105) 団員が10人に増加した。

(注106) 6月1日, 8日, 15日, 22日, 29日で、第120回から第124回まで。6月1日には「Trpt [トランペット] = ゲープハルト, トロンボーン=ニチュケ; 合唱」の、8日に「フルート, Cl [クラリネット], トランペット, Pos [トロンボーン]」の、15日に「吹奏楽器4人; Nitsche <ニチュケ> 誕生日」の、22日に「吹奏楽器なし」の、29日に「吹奏楽器; 合唱団」の注記あり。楽団プログラムあり。

(注107) 6月7日入金。「御者ヘンシエル」および、1-4日, 6-7日の注記あり。6月5日の劇団プログラムあり。

(注108) 7月6日, 13日, 20日, 27日で、第125回から128回まで。7月6日と13日に「吹奏楽器4人」の、20日に「吹奏楽器なし; I. V. [第1ヴァイオリン] ヘルトリック, エッケルト」の、27日に「吹奏楽器4人; 第1ヴァイオリン, ヘルトリックとエッケルト」の注記あり。ヘルトリックはこの7月20日から楽団に参加したのであろう。エッケルトは臨時奏者から正式団員に昇格したのであろうか。——楽団プログラムあり。

(注109) 7月13日入金(「放蕩娘」の注記あり)。7月(日は不明)の劇団プログラムあり。

(注110) 8月10日, 17日, 24日, 31日で、第129回から第132回まで。8月10日の「吹奏楽器4人, Hdg [ヘルトリック], エッケルト」の注記あり。17日, 24日, 31日の楽団プログラムあり。さらに、8月3日の楽団プログラムも発見されている。

(注111) 8月11日の入金(「もうひとりの男」の注記あり)。8月14日の劇団プログラムあり。

(注112) 9月7日, 21日, 28日で、第133回から第135回まで。9月7日と28日には、「ギャラー合唱団」の、21日には、「四重唱クラブ」の注記あり。7日, 28日の楽団プログラムあり。さらに、14日の楽団プログラムも発見されている。

(注113) 9月20日入金(「ペンション・シェラー」の注記あり)。18日の劇団プログラムあり。

(注114) 以下の項目は7月と8月の支出の合計である。

(注115) 10月5日, 13日, 17日, 19日, 26日である。第136回から第139回までで, 17日は特別に第137a回とされている。13日に「ギャラー合唱団」の, 17日に「四重唱クラブ演奏会」の, 26日に「大運動場*, 11時」の注記あり。*10月20日から26日までスポーツ祭が開催された。久留米収容所 2003, pp.93, 184。——5日, 12日, 17日, 19日, 26日の楽団プログラムあり。

(注116) 10月24日入金(「ダイナミック」の注記あり)。23日のプログラム(劇団と楽団との共催)はあるが, 第2部の劇団の演目が久留米収容所 2003, p.88に記載されているだけである。

(注117) 19日付である。本稿第3節(Ⅱ)(2)のバス募金決算書を参照。

(注118) 11月2日, 16日, 30日の第140回から第142回まで。2日には「四重唱クラブ, プログラム260枚」の, 16日に「四重唱クラブ」の注記あり。11日にも第140回「演奏会」による収入の項目がある。すべて楽団プログラムあり。さらに, 11月19日の「合唱団に収容所楽団が協力」した音楽会のプログラム「ただし, 年の記載を欠く」も, 発見されている。

(注119) 団員が9人となった。

(注120) レーマン関係資料の中にシャウムの自筆領収書がある。11月24日付で, 金額3円だけが書かれている。

(注121) 12月7日, 14日, 23日, 第143回から第145回まで。23日には「最終演奏会」の注記あり。7日, 14日の楽団プログラムあり。——「最後の日曜コンサート」あるいは「日曜に催される最後のコンサート」は, これまで日付不明とされてきた。久留米収容所 1999, p.77; 久留米収容所 2003, p.84。これはおそらく12月23日の音楽会であろう。また, レーマンとヘルトリックが指揮した, 3日の久留米高女交歓音楽会のプログラム, および, 実践楽友協会の「第九」演奏会プログラムが残されている。しかし, 収支決算書はこれらを収容所楽団の演奏会と記載していない。

(注122) 12月11日と14日の入金である。14日は, 同日の演奏会とは別個の「演奏会付き劇団」であるが, プログラムは未発見。11日の劇団プログラム, さらに17-18日の劇団プログラムあり。

(注123) これ以下は12月23日の最後の支出である。

(3) その他の会計書類

本節は, 収容所楽団関係者に対する楽器部品・楽譜の請求書・領収書, 収容所楽団が行なった募金とそれに関連する決算書, 音楽・演劇の活動拠点である第16号バラックの照明費用についての決算書を紹介する。銀行からの送金通知書と, 楽団演奏会プログラムの定期購入を要望する書類も, 「その他」として便宜上ここに分類しておく。

(Ⅰ) 楽器部品・楽譜に関する請求書・領収書

(1) ドレスデンの楽器製作・楽譜出版社, アッカーマン=レッサーの請求書1通。注文品は譜面台で, 請求金額は6マルク余りであった。1914年6月19日付で, 着払いとなっている。宛先は記されていないが, 日付から見て, これは青島のレーマンに発送されたであろう。

(2) 東京銀座・十字屋楽器店の商品発送・請求関係書類5通。①4/9/9消印の葉書。裏面によれば, 大正4(=1915)年9月9日に「独乙製」ヴァイオリンE弦3ダースが発送された。代価は5円余りであった。②5/6/29消印の葉書。ヴァイオリン・チェロ弦各2種の発送を通告した。代価は17円余りであった。①も②も, レーマン宛であり, 「当地ウエルクマイステル様^①のご注文」による, と記されている。2通とも, 消印の最初の数字は, ①の裏面から見て, 大正の年代を示すはずである。③1916年4月23日付けの送金依頼書。宛先, 金額, 品目とも未記入である。④発送通知書1通。4月8日に五線紙2種各100枚(5円38銭)を, 4月23日にチェロ弦, ヴァイオリン, ヴィオラ, チェロ弓毛や付属品(合計28円38銭)を発送した, との書類である。これには年が記されず, ベルカー^②宛である。⑤発送通知書1通。ヴァイオリン, チェロ, ヴィオラ, コントラバスの弦・弓毛各種の発送を通知した。年月日, 宛先, 合計金額は未記入である。③と⑤の弦などは, また, ベルカー宛の④の弦なども最終的には, レーマンのもとに届けられたであろう。

(3) 大阪心齋橋・三木楽器店あるいは神戸支店の納品・領収関係書類6件。すべて「シー・ナック殿」宛である。①4/8/22消印の封筒。②大正4(=1915)年8月22日付の領収書。これは「セロ糸他売点代金」3円60銭に係わる。③同年同月同日付の領収確認文書。「セロ糸他売点代金」3円60銭の領収が文章で確認された。これら3資料は分離しているけれども, ②と③は①の封筒に封入されていた, と考えられる。④?/?/19消印の葉書。裏面には6月18日と明記されているが, 年は記載されていない。そのために, この葉書の年代は不明である。品目はチェロ弦各種などで, 合計金額は15円となっている。表面の「シー・ナック Schnack 殿」のドイツ語綴りの誤りは, 裏面記載の Mr. C. Nack(収容所楽団団員)によって修正されう。⑤発送通知書。8月15日発注の「セロ糸」などの発送を通知した。⑥発送通知書。「セロ

糸、ヴァイオリン糸」の発送を通知した。⑤も⑥も発送年月日、請求金額は不明である。

(4) 東京神田・ガイザー＝ギルベルト図書・楽器・楽譜株の発送通知・領収関係書類 6件。①発送通知書と領収書。1915年6月21日付け発送通知書はナック宛で、合計金額は5.60円である。品目は Schott 云々および B&H 云々とある。ショット社およびブライトコプフ＝ヘルテル社の楽譜であろう。7月19日(年を欠く)付けの領収書(5.60円)に、久留米で署名した人名は、判読できない。②発送通知書と領収書。1916年12月1日付け発送通知書はレーマン宛で、合計金額は3.60円である。品目は Göschel 437-8⁽³⁾と謄写用麻布⁽⁴⁾2ヤードである。東京、1917年2月9日付けの領収書が付いている。③発送通知書と領収書。1917年4月30日付け発送通知書はレーマン宛で、合計金額は4.30円である。品目は謄写用麻布3ヤードである。これには2枚の文書が付いている。第1は、年月日、宛先の記載されない支払い督促状である。第2は、「オットー・レーマン〈より〉4.30〈円〉受け取り、6/VIII?/17」とドイツ語を毛筆で書き(日付は1917年8月6日であろう)、蒲原印を押した紙片である。④発送通知書と領収書。2月9日付け発送通知書はレーマン宛で、合計金額は2.30円である。品目は Schott の23種である。1917年3?月6日付けの領収書が付いている。Schott はショット社の楽譜を意味するであろう。⑤発送通知書。191?年7月27日付けナック宛。請求金額4.50円の Breikop の4種である。これはブライトコプフ＝ヘルテル社の楽譜であろう。⑥発送通知書。レーマン宛、11月1日付、0.90円とある。品目は Göschel 437-8である。この通知書の内容が②の発送通知書の品目の一部を含むことから、記載されていない⑥の年は、1916年であろう。さらに、この会社の宛名未記入の封筒もある。それによると、この会社は東京の他に、横浜とライブツィヒ(ヨゼフィーネ街)に拠点を持っていた。

(注1) 当地〈東京〉のウエルクマイスターとは、東京音楽学校チェロ教師であったハインリヒ・ヴェルクマイスター(1883年バルメンで生まれ、1907年来日、1936年東京で没。武内 1995, pp.43-44)であろう。

(注2) これは、1915年11月から1916年7月まで収容所楽団会計係を務めたアードルフ・ベルカーであろう。したがって、④の通知書の4月は1916年4月であろう。

(注3) テュービンゲン大学図書館の教示によれば、Göschel 437-438は、ゲッセン叢書437、438のフランツ・マイエルホフ著、『楽器理論』、2冊、1913年刊を指す。

(注4) 謄写用麻布は、本稿第2節の楽団収支決算書にもしばしば記載されていた、収容所楽団用楽譜の写譜に用いられたであろう。

(Ⅱ) 募金関連書類

(1) 「レーマンはもう〈コントラ〉バスを持っていない。彼の〈楽団〉にバスを贈ろう」との呼びかけと、募金者名簿〈推定1919年10月〉。第10-第14号バラックについては、呼びかけの第2の文章が「バスを買って、贈ろう」となっている。寄付者の名と寄付金額がバラック毎の用紙に記されている。士官バラック19人、22円(と無名氏5円)、〈下士官・兵士用〉第1号バラック⁽¹⁾37人、7.10円、第2号バラック76人、11.75円、第3号バラック72人、15.20円、第4号バラック69人、10.75円、第5号バラック68人、8.70円、第6号バラック53人、7.15円、第7/8号バラック⁽²⁾63人、7.70円、第9号バラック36人、8.25円、第10号バラック15人、3.85円、第11号バラック18人、6.35円、第12号バラック72人、9.50円、第13号バラック58人、7.60円、第14号バラック61人、4.65円、第15号バラック44人、5.60円、である。合計額は示されていない。私の試算では募金者が合計762人(無名氏を1人と想定)、金額は141円余りとなる。第1号バラックの用紙に11/10/19の、第6号バラックのそれに9/10/19の日付が書かれている。私はこれを募金締切日としての1919年10月9日ないし11日と考え、この資料の年代を推定した。さらに、本小節(2)を参照されたい。

この資料で特徴的なのは、募金者の数の多さである。久留米収容捕虜のほぼ7割が収容所楽団の募金要請に応じたのである。この事実は捕虜と収容所楽団との関係の濃密さを示すであろう。ところで、本稿第1節(1)で示したように、すでに1915年以来、コントラバス奏者はヴァイセンボルンであった。したがって、彼の楽器が大きく破損したために、募金が行なわれたのであろう。

(2) 1919年10月19日の収支決算書。この資料には表題がない。決算書を作成したのは、G. ヴォルケンハウアーであり、審査・承認したのは、G. ヴィルトとA. ブロックであった。収入の部は、「募金」として士官バラック22.00円、第1号バラック7.10円、第2号バラック11.75円、第3号バラック15.20円、第4号バラック10.45円、第5号バラック8.70円、第6号バラック7.15円、第7/8号バラック7.70円、第9号バラック8.25円、第10号バラック3.85円、第11号バラック6.35円、第12号バラック9.50円、第13号バラック7.60円、第14号バラック4.65円、第15号バラック5.60円、無名氏5.00円、以上合計140.85円となっている。支出の部はコントラバス1丁90.00円、レーマン楽団に委託48.69円、電報2通2.16円である。

この決算書は本小節(1)のコントラバス募金の決算書であろう。そのように判断する理由は次のとおりである。第1に、バラック別の募金額が、無名氏のそれを含めて、(1)のそれとほぼ一致する。第2に、最大の支出項目がコントラバ

スである。第3に、決算期日は(1)の募金締切期日の直後である。第4に、これの支出の部で「レーマン楽団に委託」された金額は、本稿第2節(42)の1919年10月収容所楽団決算書における収入、「バス募金の残余」の日付・金額と一致する。

(3) 90円領収書 (1919年10月12日付)。これは、小さな紙に手書きされている。コントラバスの購入価格としてヴォルケンハウアー氏から90円を受領しました。久留米にて 1919年10月12日 博士K. [カルル・] フォークト。以上である。本小節(1)の募金によって楽団は、シンフォニー・オーケストラの指導者フォークトからコントラバスを入手したわけである。しかも、この金額は本小節(2)のコントラバス代価と一致している。ただし、フォークトとコントラバスとの関係は明らかでない。

(4) オーストリア兵士への募金の趣意書と決算書 (1916年8月17日)。資料に表題は記されていない。趣意書の内容は次のとおりである。今年の皇帝陛下の生誕記念日にオーストリア＝ハンガリーの我々の戦友は、資金をまったく持っていないので、収容所楽団は本日、1916年8月17日、木曜日に愛国的記念演奏会を開いて、その純益をオーストリアの兵士たちに役立てます。プログラムの価格は20銭です。この企画の成果を完全に確保するために、英雄的な老皇帝に相応しい記念日を気にしている人々は、プログラムを一層高く買うよう、お願いします。検査の関係から、プログラム購入者は以下の名簿に記名してください(もう1枚の趣意書では、最後の文章が、「検査の関係から、以下の名簿に記名してください」、に変わっている)。

その決算書は以下の収支を示す。収入は収容所〈下士官・兵士〉から計27.55円(内訳はプログラム売上16.00円、奨金9.40円)；士官から計27.55円(内訳はプログラム売上12.45円、奨金13.80円、など)；ハイムス集金2.50円；合計55.45円。支出は印刷者・図案家に3.00円；音楽基金に2.00円；など合計6.40円。両者の差額、49.05円が分配される。49.05円の分配金受取人名簿には、アダムツェクからベトリックまで37人(いずれも皇后エリーザベト号乗組員。これらのオーストリア兵士は松尾 2003(a)、第4節の人名目録に含めなかった)が記されている。1人当たりでは1.20円から2.00円までであった。3カ所にアンデルス〈少佐〉の署名がある。

この募金のために開かれた音楽会は、収容所楽団が1916年8月17日に催した、「オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ陛下御生誕前夜祭コンサート(オーストリアの戦友のために)」であろう⁽³⁾。この決算書の収入総額とオーストリア水兵への分配金額は、本稿第2節(6)、1916年8月の収容所楽団決算書における、オーストリア水兵のための演奏会の収入額および彼らへの支出額に等しい。

(注1) 第1号バラックは士官食堂であり、時には演奏会場として用いられた、とこれまで考えられてきた。松尾 2003(a)、第2節(II)本文を参照。しかし、第1号バラックのコントラバス募金者名簿の37人中に、少なくともF. エーバーライン、ハウアー、W. クロエーター、ロロフ、ヘルリンク、ゲルリヒ、ラップ、ケルティンクの姓を読み取りうる。彼らはすべて一等兵か二等兵であった(彼らは関係捕虜人名目録には含めなかった)。そうだとすれば、ここは1919年10月の段階で彼らの宿舎であり、士官食堂ではなかったのではなかろうか。

(注2) 他のすべてのバラックと異なって、第7／8号バラックのためのコントラバス募金用紙は最初から1枚だけにまとめられている。募金者数も、2棟合計と考えるほどには、多くない。これは何を意味するのであろうか。

(注3) 久留米収容所 2003, p.53. さらに、久留米収容所 1999, p.48を参照。

(Ⅲ) 第16号バラック照明費用決算書

ここで問題の書類は第16号バラック照明有限責任組合決算書3通(1919年2月、3月、4月)である。1918年8月から1919年12月まで、第16号バラックは文化活動の拠点であった⁽⁴⁾。これら3通の報告書の署名者はビーバーである。決算書によれば、有限責任組合の支出は主として照明費(1時間当たり2月＝29銭、3月＝50銭⁽⁵⁾、4月＝46銭)であり、翌月への繰越金などが付け加わった。

組合の収入は2月＝23.97円、3月＝16.42円、4月＝16.23円であった。収入の内訳は、前月からの繰越金の他に、劇団からの拠出金が2月＝14.23円、3月＝10.06円、4月＝10.56円、室内楽から2月＝4.14円、3月＝1.73円、4月＝0.80円、シンフォニー・オーケストラから2月＝2.72円、3月＝3.03円、4月＝1.69円、収容所楽団から2月＝2.30円、3月＝0.51円、4月＝1.28円であった。これらの4団体の拠出金は、2－3月分から見ると、照明時間に基づく金額に、組合への分担金などを付加したものであった。催し物の合計回数は2月＝11夜、3月＝6夜であった(4月は不明)。催し物の内訳は2月に劇団7夜、他の4団体が各1夜であった(3－4月は不明)。照明時間の合計は2月＝28.5時間、3月＝12時間、4月＝19.5時間であった。照明時間の団体別内訳は劇団が2月20.5時間、4月16時間であり、室内楽と収容所楽団はいずれも2月に2時間、4月に0時間で、シンフォニーは2月に2時間であった。さらに、2月だけにはフ[ォン]・ヘルトリック名義による納入金(組合の収入)0.58円(1夜、2時間)があった。この団体は拠出金を負担せず、照明時間に基づく金額だけを負担した⁽⁶⁾。

3－4月分の決算書には特別の記述がある。3月：第14号バラックで1人が死亡した⁽⁴⁾ことは、当バラック〈照明有限

責任組合〉にとって不利であった。3週間の検疫が実施されたために、当期最初の催し物は2月28日から3月18日（劇団の舞台稽古）に延期されねばならなかったからである、と。また、このバラックには75個の電灯があった、とも記されている。4月：当月は収容所劇団第50回公演によって特徴づけられ、照明時間の大部分は劇場のそれである。比較的良好な天候などが、当月後半における当バラックの活動に影響した。収容所楽団は復活祭コンサートを野外で行なったからである。室内楽団は演奏会を開かなかった。4月29日に野外の舞台に新しく電線が引かれた。劇団と収容所楽団は照明費を今後は負担しなくなる。第16号バラックの照明用電線はそのままになっているが、当局の要求額が大きすぎる場合には、それは保管されねばならない。

第16号バラックが久留米収容所の文化活動の拠点であった全期間に亘って、第16号バラック照明有限責任組合は存続したであろう⁽⁵⁾。この組合の決算書が、本小節で紹介した期間以外について発見されていないのが惜まれる。

（注1）松尾 2003(a), 第2節（Ⅱ）本文を参照。

（注2）この金額から逆算すると、表示されていない、3月の照明時間は、劇団＝約13.5時間、室内楽＝1.5時間、シンフォニー＝2時間、収容所楽団＝0時間、合計15時間となる。これは、決算書本文にある12時間よりも長い。

（注3）発見されたプログラムによれば、2月の公演は劇団、「音楽の夕べ」、室内楽、シンフォニー・オーケストラ、収容所楽団それぞれ1回ずつであった。これらのプログラムの中の「音楽の夕べ」が、この決算書におけるヘルトリック名義の集会に照応する。決算書の同月の照明時間は、他の4団体の2時間＝1夜に対して、劇団は20.5時間＝7夜である。後者は舞台稽古を含むのであろう。さらに、4月については劇団2回、室内楽1回、フォークト指揮・聖金曜日コンサート1回、収容所楽団3回のプログラムが発見されている。この決算書では、同月の照明時間が劇団16時間、室内楽0時間、収容所楽団（復活祭以後）0時間、シンフォニー未記載となっていて、室内楽の活動が一致しない。また、劇団の第50回記念公演は、4月8日から10日まで3日間上演された「信仰と故郷」である。次節（Ⅰ）（注5）を参照。津村 2000, p.38では、これは49番目の演目とされている。4月の全照明時間から劇団の照明時間を差し引いた3.5時間は、言及されていない、シンフォニー演奏会と復活祭以前の収容所楽団の演奏会とを示す可能性がある。なお、収容所楽団の演奏会は、本稿第2節（36）－（37）の同楽団収支決算書から明らかになったように、2月1回、3月0回、4月3回（うち復活祭以前1回）であった。

（注4）1919年3月の死亡者はケットゲン（あるいはケッティゲン、ケッツゲン。バラック番号は不明。3月2日没）だけであった。彼の死因は久留米収容所 1999, p.36；久留米収容所 2003, pp.19－20, 184によれば、流行性脳脊髄炎であった。さらに、瀬戸 2001, p.93をも参照。この決算書によれば、収容所当局はすでにケットゲンの死亡前から、遅くとも2月28日から、検疫作業を開始していたわけである。

（注5）ただし、収容所楽団の収支決算書は、本稿第2節の（36）、（37）と（44）に電灯費を計上しただけである。

（Ⅳ）その他

（1）獨亜銀行神戸支店からのレーマン宛て送金通知書2通（1916年6月と同年7月）。1916年6月の通知書には、当地〈神戸〉のA.ベルカー氏の依頼によって楽団員8人に現金で63円、とある⁽¹⁾。また、同年7月の通知書には、当地のA.ベルカー氏の依頼によって音楽基金⁽²⁾に現金で48円、とあり、11人への金額が明示されている。11人はレーマン、アスペック、ハイムス、ナック、ニチュケ、ヴァイセンボルン、ゲーブハルト、キューネ、エペ、フレーベル⁽³⁾、ヘックである。レーマンへの支給額の8円は他の団員の2倍である⁽⁴⁾。

（2）日曜演奏会プログラム定期送付希望者への要望（仮題）（1916年9月1日付）。この資料にも題目がないので、上記の仮題を付けた。日曜音楽会のプログラム販売を単純化するために、我々は定期配達希望者に署名を要望します。プログラム代金は毎月10銭⁽⁵⁾で、毎月1日に徴収されます。配達方法は従卒宛てですか、部屋宛てですか。以上の内容の文章がタイプで印刷されている。最上部に「レーマン 演奏会」の手書き文字が、日付の次に徴収責任者の署名がある。この用紙に希望者65人の姓と、〈配達先は〉従卒（姓）か部屋か、が書き込まれている。最初の署名者はアンデルス〈少佐〉であろう。なお、レーマンの長男によれば、徴収責任者の署名は間違いなくレーマンの特徴的な署名である。

ここで署名を要請されたのは、次の理由から士官と推定される。第1に、配達方法が従卒宛てを含む。第2に、私が判読できた署名者は、俘虜名簿と照合すると、すべて久留米収容士官であった。第3に、本稿第2節の収容所楽団決算書（8）、1916年10月に、士官予約者64人からの収入が初めて記録された。

（注1）8人の個人名は書かれていない。この月にレーマンへの送金額が翌7月と同じように他の団員の2倍であったとすれば、レーマンは14円、その他は7円となって、送金額は、端数なくすっきりと割り切れる。

（注2）これも前月と同じようにレーマン宛である。さらに、この寄付金も、前月のそれと同じように、収容所楽団収支決算書に記帳されなかった。

(注3) 通知書に神戸で書かれた文字は難読であるが、受領の署名から明白である。

(注4) この団員数11人は、翌8月の収容所楽団収支決算書で報酬を受けた団員の数と一致する。そして、この11人は、1915年10月の楽団規約案に示された9人に、フレーベルとヘックを加えた人数である。移動させられたアスベックを除く10人は、1919年12月の楽団団員名簿に記載されている。ただし、楽団団員が1916年8月に収容所楽団から受け取った金額は、全員均一であった。

(注5) 1919年2月16日の収容所楽団プログラムには10銭と5銭の2種類があった。松尾 2003(a), 第2節(Ⅱ)(注2)を参照。

(4) レーマン宛て感謝状と久留米収容時代の新聞切抜

(Ⅰ) レーマン宛て感謝状

(1) 収容所楽団第100回演奏会に際しての感謝状3通(いずれも1918年9月8日付)。

第1は、第100回演奏会のプログラムを裏面に付けて、キュンネ、ナーゲル、パウルゼンとヴォルケンハウアーの4人から収容所楽団主宰＝指揮者レーマン氏に宛てられた感謝状である。感謝状の上部に、堅琴を弾く人が、下左に、ピアノを弾く人が、下右に、ダンスを踊る3組の男女が、小さな枠の中に描かれている⁽¹⁾。

第2は楽団員からのものである⁽²⁾。この感謝状には、第100回演奏会に際して、収容所楽団の創立と発展への功績を称えて、久留米収容所日曜音楽会の主宰＝指揮者otto・レーマン氏に、楽団員より捧ぐ、と記されている。上部左右には、縦笛と撥弦楽器を演奏する人が、下部には、ほぼ満席の野外劇場が描かれている。

第3は兵士収容所からのものである。この感謝状は次のように言う。我々の収容所楽団の結成と発展、および、元氣と勇気を与える、その日曜演奏会に関する成果と功績について、otto・レーマン氏と彼の楽団団員に感謝して、久留米兵士収容所は集会を開き、そこでの募金21円70銭をレーマン氏に贈る。同時に、この資金を楽団団員の食費⁽³⁾などに用いるよう、要望している。

(2) 第3回久留米収容所美術工芸展覧会に際しての感謝状(1918年11月29日付)。たゆまぬ演奏によってこの展覧会の成功に大いに貢献した収容所楽団主宰＝指揮者otto・レーマン氏に、友好的記念のために⁽⁴⁾、とある。感謝文の左右には3個ずつの飾りが描かれている。左側上から飾り箱、帆掛け船、天馬、右側上からハンマー・ペンチ、菊花・和服女性・鳥居、パレットである。感謝文の下には野外劇場が描かれている。広場には椅子がなく、人もいない。この絵は展覧会案内書 1918の扉絵、および、久留米収容所 1999、表紙の絵と同じである。展覧会主催者として最初に署名したのは、アルトゥル・ビーバー予備少尉であり、その次がG.d.L.〈後備一等兵〉M.〈マックス・〉パウアーである。

(3) 久留米収容所劇団第50回公演に際して収容所楽団レーマンに宛てられた感謝状(1919年4月12日付)。「第50回公演に際して我々に示された好意に対して、あなたとあなたの楽団の構成員に感謝します」。これに署名したのは、「劇団主宰者」ハリヤーである⁽⁵⁾。

(注1) 松尾 2002(d), p. 119の図2。第100回演奏会の曲目は久留米収容所 1999, p. 58; 久留米収容所 2003, pp. 64-65に、そのプログラムの表面は久留米収容所 1999, p. 43にある。感謝状献呈者のうち、パウルゼンとヴォルケンハウアーは収容所楽団収支決算書にしばしば言及された。そして、ヴォルケンハウアーは本稿第3節(Ⅱ)(2)のコントラバス募金決算書も作成した。

(注2) 松尾 2002(d), p. 119の図3。

(注3) これは、収容所の給食にかなりの問題があったことを、意味しているのであろう。

(注4) この展覧会は、「収容所の祭典」と呼べるほど大規模であり、同時に音楽会、演劇、スポーツも行なわれた。久留米収容所 1999, p. 15; 久留米収容所 2003, pp. 92-93。——この感謝状は、松尾 2002(d), p. 119の図4を参照。

(注5) 収容所劇団のプログラムによれば、劇団の第50回公演(1919年4月8-10日)に際してレーマン指揮の収容所楽団は幕間の音楽を演奏したはずである(その曲目は、松尾 2003(a), 第2節(Ⅱ)(注21)(v)を参照)。そのために、また、以前からの協力に感謝して、この感謝状が書かれたのであろう。

(Ⅱ) 久留米収容時代の新聞切抜

(1) 「シカゴの楽団指揮者ヴィレ」。レーマン関係資料は久留米収容時代のドイツ語新聞の切抜3点を含む。その中の1点がこれである。表題はないが、記事中央の写真の説明句から名付けた。記事の内容は以下のとおりである。

新しい月桂冠がO. K. ヴィレ氏の頭で回っている。彼は、合衆国を演奏旅行している青島楽団の指揮者である。先週報告したように、かつての青島第3海兵大隊の音楽家たちは現在シカゴにいる。彼らはドイツ〈系〉の聴衆を非常に感激させた。楽団指揮者ヴィレがドイツ大使、フォン・ベルンストルフ伯爵⁽¹⁾から然るべき許可を得た後、ドイツおよびオース

トリア＝ハンガリー救援協会は彼らに演奏会の期間を延長してもらった。すでに知られているように、アデーレ・クリューガー夫人が楽団に同行し、楽団の決定的な成功に大いに寄与した。

『アーベント・ブラット』紙宛ての手紙の中でこの楽団指揮者は、極度に骨の折れる仕事のために——彼はほとんど毎日2回の演奏会を開いている——外面的にはドイツの楽団指揮者の理想から日々に遠ざかり、冥府の楽団指揮者の地位を求めねばならないほどに、彼は衰えた、と主張している。〈しかし、〉我々の友人〈ヴィレ〉の写真の中で最も新しいものである、上の写真にはそれはほとんど認められない。この演奏旅行の全収益は戦争被害者に向けられており、楽団指揮者は彼らのための奉仕に専念して、我を忘れていると思われる。ドイツ人音楽家たちは最初は、メキシコとの戦争の危険が差し迫った⁽²⁾時に、兵士の家族のために演奏会を開き、それによってドイツの文化事業の範囲を拡大しようとした。その事業は、彼らが青島で祝福豊かに開始し、アメリカで継続したものである。

シカゴの諸新聞の報道から見ると、そこで楽団は、まったく驚くべき成果を、しかも、オーケストラ音楽としてのドイツ軍隊音楽の領域で、達成した。アデーレ・クリューガー夫人も実にすばらしい印象を与えた。楽団指揮者自身は、歌劇の歌が彼女の本分であり、この分野で彼女は優れた水準まで容易に達しうる、と確信している。ニューヨークのすべての友人はこの楽団、この天才の指揮者とこの独唱者の更なる大成功を祈っている。

以上のような文面の切抜の裏面に1916年7月26日の日付とともに手書きされた新聞紙名は、判読できない（最初の2字はおそらくニューヨーク）。裏面には詩と散文が印刷されているだけなので、それからは発行地は推定されえない。しかし、本文最後の文章から、本新聞は米国（おそらくニューヨーク）で発行された、と推定される。この記事によれば、かつての青島第3海兵大隊軍楽隊の隊長と隊員の相当部分とは、レーマンと異なって、日独間の戦闘開始前に青島を離れ、遅くとも1916年夏には米国で活動していた⁽³⁾。

(2)「戦争捕虜に楽譜を」。これが久留米時代の第2の新聞切抜である。「日本、久留米の捕虜収容所からの陳情——誰かエルンスト・ティーセンを知りませんか」、という副題が付いている。1915年8月10日付、久留米発、『アーベント・ブラット』紙宛ての投書である。その内容は次のとおりである。

拝啓 我々のすべては大いに満足して貴紙を読み、高く評価しています。その1部が手元にあります。私はそれによって貴紙の住所を知り、新しい世界とのいかなる関係も欠けている状況の中で、一つのお願いを述べたいと思います。その実現は我々すべてにとって非常に重要です。——それは楽譜の送付に関係しています。

同封した2枚の写真からお判りになるように、我々は1楽団を創設しました。楽団は今ではバス1丁とヴァイオリン数丁によって、非常に好ましく強化されています。しかし、残念ながら楽譜がなお不足しています。ピアノの楽譜と四重奏〈の楽譜〉は天津、北京などで手に入ります。それに対して、我々が公衆のために必要とする軽音楽、例えば、喜歌劇の曲、ワルツ、行進曲など〈の楽譜〉は、どこにもありません。我々が必要とするものは、ピアノ、ヴァイオリン2声部とヴィオラという小室内楽団のための配置〈楽譜〉です。——前奏曲などの楽譜があれば、我々は大変感謝して受け取るでしょう。軽快なアメリカのダンス〈曲〉がここでは特に好まれます。しかし、すでに述べたように、我々はすべてを心から感謝して受け取ります。オーストリアのものも恐らくあります。我々の勇敢な同盟国の戦友も、我々と一緒に同じ収容所に抑留されているからです。久留米収容所に今いる我々は、1,300人以上です。

貴紙はアメリカ最大のドイツ語新聞なので、私は貴紙にお願いしました。そして、この文章を、できるならば、同封の写真も、公表するよう、心からお願いします。

我々が、できるならば、小室内楽団のための楽譜をお願いすることを、私は最後にもう一度申し述べます。

すべての戦友の名において前もって心から感謝し、ドイツ式に敬礼します。 敬具

ゲオルク・フィンスラー

追記。貴紙の定期購読者の中にベルリン＝テューゲル出身のエルンスト・ティーセン氏はいませんか。従兄弟の彼から私は数年来連絡を受けていません。

古い新聞などの送付についても私は貴紙に感謝しています。

前もってもう一度感謝します。 敬具

ゲオルク・フィンスラー 日本、久留米、第3〈海兵〉大隊第1中隊一等兵

なお、この投書の冒頭で新聞編集部は次のように記している。楽譜送付についての久留米収容捕虜の要望に全力で応じるように、我々はお願います。そして、我々は楽譜の送付を仲介します。〈我々への〉すべての送付物には「久留米の捕虜のために」と上書きしてください。

この切抜について4点を記しておきたい。(i)投書の文中に「貴紙はアメリカ最大のドイツ語新聞」と書かれており、宛先は『アーベント・ブラット』である。切抜の裏面は広告欄である。まず、New York Schützen Gor??の広告がある。次に、その他の広告主の住所は時には街、丁目とN.Y.で表現される。街と丁目だけでしばしば表現されている場合には、N.Y.が省略された可能性がある。さらに、1915年度（第53回）カンシュタット国民祝祭は126丁目、2番街のハーレム・リヴァ公園で1915年9月12、13、19日に開催される、主催ニューヨーク・カンシュタット国民祝祭協会、云々の広

告、および、僅かに「9月14日、15日」だけが判読できる広告もある。そのために、この新聞は米国の新聞であり、新聞のこの号は1915年9月前半に発行されたと推定される。バイエルン州立図書館によれば、『ゲルマニア・ヘロルト。アーベント・ブラット』なるドイツ語新聞が、米国ウィスコンシン州ミルウォーキーで当時発行されていた。(ii) 投書者の所属を私は第3海兵大隊と推定する。投書のⅢ.4.B.はⅢ.S.B.の誤植と考えられるからである。また、投書者の氏名はゲオルク・フィンスラーと印刷されている。これは、所属部隊、階級、名が同じなので、俘虜名簿の海兵第1中隊一等兵ゲオルク・フィンスター（姓の1字が異なる）であろう。彼は旧収容所楽団の団員であったかもしれないが、同年11月の新楽団の団員にはならなかった。(iii) 投書者は、2枚の写真を同封した、と書いている。しかし、新聞に掲載されたのは、1枚だけである。(iv) 我々は1楽団を創設しました、とこの投書に記されている。久留米でその3週間前に事実上の第1回演奏会を開いたシンフォニー・オーケストラを、投書者は意識していないようである。

(3) 「日本からの手紙」。これは第3の新聞切抜である。婦人救援協会会長ベルタ・ゲッチュマン夫人は、非常に興味のある手紙を日本、習志野のクーロ中佐から再び受け取った。その手紙から『トリビュン』紙は次のように抜粋する（以上、編集部序言）。

あなたからの親かな小包が大量に到着したことを、私はまず報告します。それに対して私は全員の名において感謝します。『園亭⁽⁴⁾』の多くの巻が我々を特に喜ばせました。それは直ぐに図書室に移されました。

沢山の楽譜の小包が私のところに遂に到着したことも、あなたを喜ばせるでしょう（これらの楽譜は、指揮者T. R. レーゼおよび、オマハとカウンスルブラフズのその他のドイツ〈系〉音楽家たちによって集められたもので、小包は8ヶ月以上も旅をしていた——編集部注）。私は、相応の楽器と配役をここに持っていれば、その一部を我々のために留めておいたでしょう。我々はいくつかの弦楽器しか持っていないので、私は楽譜全部をその本来の目的地、すなわち、かなり大きな、複数の楽団が組織されている久留米、に転送しました。その喜びは大きいでしょう。

魅力的な葉書、特にペーター家の有名な子供たちのそれを、我々は大変喜びました。私はそれらを、感謝の詩の複製品と同じように士官たちと兵士たちに配りました。

私はあなたからもアメリカの余所からも沢山の新聞を受け取っています。

シカゴからはドイツ人製作の楽器の小包も到着しました。これも、あなたの宣伝の嬉しい結果です。

当地は今、暑い夏に入りました。我々の庭園は、我々が望んだほどには、残念ながら繁茂していません。土地が痩せてきています。日本は、想像されているほどには、花の国ではありません⁽⁵⁾。日本はまったく独特の魅力を持っています。しかし、私が初めて中国、日本、インドなどを3年間、旅して、1908年にドイツに帰ったとき、我々の闊葉樹林と山々の美に勝るものはないことを、私ははっきりと認めました。我々がそれらを間もなく再び見ることができれば、良いのですが、我々はなお忍耐せねばなりません。

これは、習志野収容所の先任将校クーロ中佐がゲッチュマン夫人に送った手紙の抜粋である。この掲載紙は、米国で発行された『トリビュン』紙であろう。本文にネブラスカ州オマハ市、アイオワ州カウンスルブラフズ市が記されており、裏面の広告欄にネブラスカとオマハからの広告、ワシントン州のインディアン指定居住地コルヴィルの売り出し広告、などが認められるから、米国発行の新聞であろう。『ニューヨーク・トリビュン』であるかもしれない。ドイツ諸図書館所蔵定期刊行物目録によれば、この新聞は1866年から1924年まで刊行されていた。記事の発行年月日は不明である。楽譜の小包は8ヶ月以上も旅をしていた、当地は今、暑い夏にはいりました、との記述から推測すれば、クーロの手紙は1916年の夏に書かれたものではなかろうか。

この切抜によれば、クーロは多くの楽譜を、本来の目的地であり、複数の楽団が組織されている久留米に、習志野から転送させた。この楽譜は、上記第2の切抜の要請に基づいて米国から発送されたものであろう。——クーロの手紙に関連する事実が、習志野に収容されていたクリューガーの回想録、および、フォーゲルフェンガー、ノイマイヤーとハムの日記に記されている。(a)米国ネブラスカ州オマハのベルタ・ゲッチュマン夫人は、その地のドイツ系住民の間で募金を行ない、品々を日本へ送る活動をねばり強く続けていた（クリューガー⁽⁶⁾）。(b)他の収容所から習志野に1916年10月22日に到着した戦友の中に、「もとの上海の楽長が、さまざまなヴァイオリン奏者と楽器を伴って、加わっていた」（フォーゲルフェンガー⁽⁷⁾）。音楽会が1916年のクリスマスに開かれた。これは、「福岡からやってきた人たちや天才のミリエス（上海）」などによって催された（ハム⁽⁸⁾）。ミリエスは「元は上海の音楽院の指揮者」であった。彼は1919年春には習志野で「約60人の立派なオーケストラと共に、ほとんど毎週日曜と金曜日に大音楽会を行なった」（ノイマイヤー⁽⁹⁾）。習志野には、「およそ40名から成る収容所楽団、弦楽四重奏団、…ダブル・カルテット」があった。コンサートマスターのミリエスは「短期間の内に、約40名ないし45名から成り、申し分なく演奏する楽団を組織することに成功した。すべての楽器が、第1ヴァイオリンからコントラバス、ピアノ、ハルモニウムから打楽器まで並んでいた。…楽器はたいていその奏者の私物で、日本や中国、それどころかドイツからも送らせたものだった。二、三の楽器（ピアノ、ハルモニウムやコントラバス）は東京のドイツ人からの貸し出し品だった」（クリューガー⁽¹⁰⁾）。

(a)のゲッチュマン夫人は、クーロが上記手紙を寄せた、同姓の夫人と同一人物（名の1字だけが異なる）であろう。(b)

の習志野収容所楽団の構成は、クリューガーによれば、40-45名であり、ノイマイアーによれば、1919年春に約60人であった。楽団が組織された時期をクリューガーは明示していない。フォーゲルフェンガーの日記に依拠すれば、それは、上海の楽長＝ミリーエスが、「さまざまなヴァイオリン奏者と楽器を伴って」、移ってきた1916年10月以後であろう。なぜなら、1915年のクリスマス・コンサートでは、まだ「室内楽が中心」であった⁽¹¹⁾からである。あるいは、「ピアノ、バイオリン、チェロのトリオ・コンサート」であった（ハム⁽¹²⁾）からである。『フランクフルト新聞』（1916年8月）に掲載された、習志野収容の1ドイツ兵の手紙によれば、「シカゴやネブラスカのドイツ系アメリカ人から慰問品がさかんに届いて、その中には楽器のたくさん詰った大きな箱があった…⁽¹³⁾」。これらの楽器の到着は習志野での楽団結成に寄与したであろう。

以上から見ても、本小節⁽²⁾のフィンスラー（フィンスター）の投書は1916年8月よりも8ヶ月以上前に、おそらく1915年9月の新聞に掲載されたであろう。

（注1）ヨハン＝ハインリヒ・フォン・ベルンストルフ伯爵（1862-1939）は1908年から17年の米国参戦まで駐米ドイツ大使であった。

（注2）米国は1914年4月から1917年1月にかけてメキシコに武力介入した。

（注3）松尾 2003(a), 第3節（注14）を参照。

（注4）これは、1853年から1937年までベルリンで発行されていた雑誌であろう。——この雑誌が喜ばれたのは、習志野収容所で1916年2月以後、青島捕虜が園亭、一種の別荘、を盛んに建築した（習志野収容所 2001, pp.43-45, 151；習志野市史研究 2003, pp.30, 42-44, 48, 50-51, 88-89），という事情と関連するであろう。

（注5）クロー中佐とは異なる評価をクリューガーは書き留めている。「あずまの脇や間には、あらゆる種類の花の花壇が出来た。夏や秋には、そこには本当に見事な花がそろった。夏にはある種の昼顔が、とりわけ大きく育った…」。『秋にはたいいていエゾ菊や、あらゆる種類の菊が、その多様な形と華麗さで、我々の目を楽しませてくれた』。習志野市史研究 2003, p.89。

（注6）習志野市史研究 2003, p.65。

（注7）習志野収容所 2001, p.163。

（注8）習志野市史研究 2003, p.22。

（注9）習志野収容所 2001, p.179。

（注10）習志野市史研究 2003, pp.65, 67。

（注11）習志野収容所 2001, p.63。同書, p.147のプログラムを参照。

（注12）習志野市史研究 2003, p.20。

（注13）習志野収容所 2001, p.63。

（5）恵比寿座演芸会参加者名簿

「久留米劇場参加者名簿」と題する、この資料は1919年12月14日付で、1ページにタイプされている。I＝レアンダー、II＝曲芸師、III＝音楽、IV＝トーン、V＝技術に区分して、人名が列挙されている。その後に、但し書きとして記されているのは、他の部分と重複する人は、カッコ内に示したこと、写真家、通訳などとして署名者がさらに7人を選ぶこと、劇場の楽屋は上記の群別に割り当てられること、参加者は割り当ての部屋から離れないこと、などである。最上段に「レーマン殿」と手書きされ、最下段にハリアーが署名している。ごく薄くなっているタイプ文字の人名を、可能なかぎり判読してみる。

I＝レアンダー：（1）エンゲルハルト、（2）ビーバー、（3）ガーデブッシュ、（4）レーデ、（5）エッガーシュ⁽¹⁾、（6）ティーデマン⁽²⁾、（7）ハリアー、（8）ハーケ、（9）メルク、（10）ザイゲル、（11）デュッパ、（12）クロート⁽³⁾、（13）ニッケル、（14）ゲルトマッヒャー、（15）クラッペル、（16）ペーベル、（17）フ[ォン]・ボーバー、（18）ナック、（19）P. フィッシャー⁽⁴⁾、（20）ハインリヒ、の合計20人。重複者1人（ハイムス）。

II＝曲芸師：（1）リンデマン、（2）カネスキー⁽⁵⁾、（3）ヴィールニー、（4）グラーフ、（5）シュトローム⁽⁶⁾、（6）P. シュミット、（7）クレメンス・シュミット、（8）判読不能、の合計8人。重複者2人（デュッパ、ザウルビーア⁽⁷⁾）。

III＝音楽：（1）レーマン、（2）フ[ォン]・ヘルトリック、（3）コーツァー⁽⁸⁾、（4）エッケルト⁽⁸⁾、（5）フレーベル、（6）エペ⁽⁸⁾、（7）ヘック、（8）ハイムス、（9）クルーゲ、（10）ザウルビーア、（11）プレントライン、（12）ミュラー、（13）ヴォルフ⁽⁹⁾、（14）ペーム、（15）ディートリヒ、（16）デューニッシュ⁽¹⁰⁾、（17）パプケ、（18）レフラー、（19）ギルマン、（20）ペシユテル、（21）Th. オルトレッツ⁽¹¹⁾、（22）クラスマン⁽¹²⁾、（23）メーネルト、（24）

キューネ、(25) ゲーリッケ、(26) プロントケ、(27) ヴァイセンボルン、(28) 判読不能、(29) ヴィルト、(30) ユンゲ、(31) ヒューン、(32) フリッケ、(33) ヴェルトツ、(34) ゲーブハルト、(35) ヘルマン、(36) ニーチュケ⁽¹³⁾、(37) ローツ、(38) フリーデル、(39) エーメンツ⁽¹⁴⁾、(40) シュヴァーネベルク、(41) ナイトヘーファー⁽¹⁵⁾、(42) ツァイス⁽¹⁶⁾ (ただし、彼の名は1本の横線で抹消され、判読不能な人名が手書きされている)、の合計42人。重複者3人(ナック、ハーケ、ビーバー)。さらに6人が手書きで追加記入されているが、判読不能である。

IV＝トーニ：(1) クライケ、(2) タイレ、(3) ルンテムント、(4) フォスカンプ⁽¹⁷⁾、(5) リンネ、(6) 水兵1人、(7) ブルーノ・フィッシャー、(8) ヒルシュベルガー、(9) プラール、(10) ヤン・フィッシャー⁽¹⁸⁾、(11) インベルク、(12) アーレンゲ⁽¹⁹⁾、(13) ピーク⁽²⁰⁾、の合計13人。重複者6人(Th. オルトレップ、ロート、ハーケ、ニッケル、エンゲルハルト、クラッペル)。

V＝技術：(1) カイザー、(2) デルリー、(3) キースリンク、(4) ハーン、(5) ゲーベルト、(6) ヤーン⁽²¹⁾、(7) 判読不能、(8) カルコプフ⁽²²⁾、(9) カルル・ヴェーバー、(10) カール⁽²³⁾、(11) ザレヴスキー、の合計11人。

以上の合計を資料は103人と記している。重複者を除いた合計は94人である。Ⅲの部分に追加された6人を加えると、100人となる。さらに、企画責任者ハリーアが写真家、通訳などとして7人を選んだから、総計は107人となる。

Ⅲ(音楽)の筆頭にレーマンが、その次にヘルトリックがタイプされている。この記載方式から見て、ここではレーマンが主として指揮した、と考えられる。収容所楽団団員名簿にある21人全員は、ヘルトリック少尉を含めて、Ⅲに記されている⁽²⁴⁾。しかし、Ⅲの人数は、重複者を加えると45人、手書きの人数を加えると、51人にも達する。それでは、収容所楽団団員名簿に載せられていない音楽部門参加者、24人ないし30人は、何者か。久留米収容所には収容所楽団とシンフォニー・オーケストラの2楽団があり、前者は後者の中核であった、と言われてきた。ところが、シンフォニー・オーケストラの団員名簿は知られていない。あの24人ないし30人は、シンフォニー・オーケストラだけに所属した人々であろうか。あるいは、楽器を少しでも演奏できる下士官・兵士が、大挙して参加したのであろうか。その1人が、1915年の収容所楽団規約案で臨時奏者とされながら、1919年の収容所楽団団員名簿に含まれないプレントラインであろうか。収容所楽団の用務員エーメンツ(エームンツ)は、音楽の部でどのような役割を果たすのであろうか。いずれにしても、Ⅲに書き出された人々は、久留米収容所の音楽生活を支えた捕虜の多くを含むと考えられる。

収容所劇団は1919年12月11日に笑劇レアンダーを、1919年2月6日に悲劇トーニを上演した。前者のプログラムに名を挙げられた出演者、15人のうち、ヘルマースを除く14人は、本表Ⅰに記されている。また、後者のプログラムに名を挙げられた9人は、全員が本表Ⅳに記載されている。他方で、収容所劇団のプログラムから約100人の出演者が検出される、とのことである⁽²⁵⁾。これら演劇関係者の中で、本表ⅠからⅤまでの出演者・技術担当者として確認される人の実員は、40人を超える。収容所劇団出演者はⅠとⅣばかりでなく、Ⅱ、ⅢとⅤにも入っているからである。さらに、収容所劇団で20回以上に出演した9人の中で、プショフ、シュタインバッハー、ボーベルクの3人だけが久留米劇場に参加しなかった⁽²⁶⁾。したがって、収容所劇団の主要な団員の多くはこれに関係していた。

もっとも、シンフォニー・オーケストラの指揮者フォークト予備少尉と室内楽の主宰者ヴィル予備少尉は参加していない。また、シンフォニー・オーケストラは相当数の士官を含んでいたようであるが、彼らも、士官相当の衛戍管理部管理官ヘルマンを除いて、この表に記載されていない。さらに、演劇の部に参加した士官は、ビーバー、ボーバース、メルクの3予備少尉であった。

1919年12月14日付のこの資料、久留米劇場参加者名簿は、同月19日に始まる恵比寿座獨逸人演藝会の参加者を示すであろう。名簿におけるⅠ、Ⅳの演目と恵比寿座における演芸会の演目とが同じであり、この資料の日付が恵比寿座演芸会の直前であるからである。したがって、この資料は恵比寿座演芸会参加者名簿であろう。久留米収容捕虜と久留米市民との交流はそれほど活発でなかったけれども、この名簿は、規模の最も大きな交流の準備過程をドイツ側から記録した資料である。舞台上に上り、あるいは、裏方として出演者を支えた人々は、久留米収容捕虜全体の1割弱であった。それに対して、演芸会の初日には久留米の「老若男女一千餘名」が、5－6時間に亘って、異文化を体験した。日本人観客の数は3日間でおそらく3千人を超えたであろう。

恵比寿座演芸会について参加者名簿が作成されたとすれば、久留米高女での交歓音楽会と「第九」全曲演奏会についても参加者名簿が作成された可能性がある。これらの音楽会は収容所楽団ないしシンフォニー・オーケストラの通常の演奏会ではなかったからである。名簿はどこかにまだ眠っているのであろうか。

(注1) 最後の文字はこの名簿でshである。劇団プログラムでも同じである。津村 2000, p.48。しかし、俘虜名簿1917, pp. 1, 15で類似の姓の久留米収容者はssだけである。

(注2) この名簿ではTieであるが、俘虜名簿 1917, pp. 4, 60で類似の姓はTiだけである。

(注3) これは資料破損のために判読できない。他方で、本表Ⅳの「重複者」にロートが記載されているけれども、他の個所にロートが挙げられていない。また、1919年12月11日に収容所劇団がレアンダーを公演したとき、ロートはそれに出

演した。津村 2000, pp.38, 45. 以上からロートと推定した。

(注4) 名の頭文字は判読しにくい。P. と解する。第1に, B. フィッシャーとJ. フィッシャーはこの参加者名簿でトニーに出演しており, レアンダーでは重複者とされていない。第2に, P. フィッシャーは収容所劇団の舞台に何度も立ったことがある。津村 2000, p.45; 瀬戸 2001, p.76. 第3に, 俘虜名簿 1917, pp. 1, 17 (414の Franz Fischer は俘虜名簿 1915, p.17では Franz Fischesser とされている)によれば, E. フィッシャー (ピアノの演奏で活躍)と R. フィッシャーも久留米に収容されていた。しかし, この2人は収容所劇団公演に出演しなかった。

(注5) カネスキーに近似した姓はカミンスキーだけである。俘虜名簿 1917, pp. 2, 29を参照。

(注6) この名簿では綴りの最後が om であるが, ohm と考える。俘虜名簿 1917, pp. 4, 59を参照。

(注7) 松尾 2003(a), 第2節(I)で紹介したように, 恵比寿座の独逸人演芸会では「曲藝・逆立ち・拳闘」(『福岡日日新聞』),あるいは,「バラエティーショー」(『クルーゲ日記』)が演じられた。これらを本表Ⅱの「曲芸師」が担当したとは,立証できない。少なくとも,Ⅱに重複者として書かれている2人,デュッバーとザウルビーア,さらに,(4)のグラーフ(1人は判読不能)は,津村 2000; 瀬戸 2001によれば,久留米収容所劇団の舞台にしばしば登場した人々であった。また,日本側資料にある,「数番の獨唱・舞踏」の担当者が,どこに記載されているか,も不明である。久留米高女の交歓音楽会で独唱したペーベルは,「曲芸師」の部ではなく,「レアンダー」に記載されている。

(注8) これら3人は判読困難であるけれども,収容所楽団団員名簿から推定した。

(注9) これは Wolff と読める。しかし,類似した姓は Wolf だけである。俘虜名簿 1917, pp. 4, 66を参照。

(注10) デューニッシュを抹消することなく,ここに文字が手書きで追記されている。しかし,後者は判読できない。

(注11) これは判読しがたい。しかし,本表「トニー」の部の重複者として Th. オルトレップが記されており,参加者名簿の他の部分に彼の名がないから, Th. オルトレップと想定した。後者はテオドル・オルトレップである。俘虜名簿 1917, pp. 3, 44によれば,オルトレップ姓の捕虜は久留米に3人いた。恵比寿座参加者名簿のこの記事を手掛かりとして,私は収容所楽団団員オルトレップの名を3人中テオドルと推定した。

(注12) 頭文字は参加者名簿では C, 俘虜名簿では K となっている。

(注13) ここでは Nie と記されている。しかし,収容所楽団団員名簿と俘虜名簿では Ni である。俘虜名簿 1917, pp. 3, 43を参照。

(注14) ここにはエーメンツ(me)と記されているが,近似の姓はエームンツ(mu)だけである。俘虜名簿 1917, pp. 1, 15を参照。

(注15) ここにはナイトヘーファー(hö)と記されている。しかし,類似の姓はナイトペーファー(bö)だけである。俘虜名簿 1917, pp. 3, 42を参照。

(注16) ツァイスの名が参加者名簿では線で消されているので,彼は恵比寿座に参加しなかったであろう。

(注17) ここでは Voss である。収容所劇団プログラムでも同じである。津村 2000, p.48. 俘虜名簿で類似した姓は Vos だけである。俘虜名簿 1917, pp. 4, 62を参照。

(注18) ここでは名がヤンであるが,俘虜名簿ではヨハンである。

(注19) アーレンゲ(le)と読めるが,近似した姓はアーリング(li)だけである。俘虜名簿 1917, pp. 1, 5を参照。

(注20) 難読であるけれども,ピークと解する。

(注21) 難読であるけれども,ヤーンと解する。

(注22) これは Kalkopf としか読めないが,俘虜名簿の Kalkof か Kalthoff であろう。俘虜名簿 1917, pp.2, 29を参照。

(注23) 最初の2字が難読であるが,カールと考える。

(注24) 収容所楽団団員名簿で22番目の楽団用務員エームンツも,この参加者名簿では音楽の部に載せられている。

(注25) 津村 2000, pp.43-46.

(注26) 津村 2000, p.46を参照。

(6) 楽譜, その他

(1) レーマンは,大型トランク2個に詰まった楽譜を遺品として残したという。その中には久留米時代の楽譜も多かったであろう。収容所楽団は写譜に対して報酬を支払い,楽団の所有物となった,それらの楽譜は楽団規約案によれば解放・帰国時にレーマンの所有となったからである。しかし,現存する遺品は3(あるいは4)曲の楽譜だけである。

(a) 弦楽6部(助奏ヴァイオリンを含む)とピアノのための作品。総譜である。作品名と作曲者名は記されていない。最後に「1916年1月13日,1916年1月22日,オットー・レーマン」の署名がある。推敲の跡が随所にあるから,写譜ではなく,レーマンの作品と考えられる。有道惇教授によれば,凝った旋律を所々に持つ,行進曲風の作品である。ピアノは管楽器の代替であろう。

(b) 弦楽4部のための、ごく小さな作品2曲（あるいは、1つの曲の2つの楽章）。パート別に1枚の楽譜があり、その表裏に書かれている。作品名、作曲者名、年月日は記されていない。楽譜の書き方が上記(a)と似ているので、レーマンの作品と思われる。有道惇教授によれば、2つの曲（あるいは楽章）は、曲想が異なるけれども、行進曲ではない。

(c) 唱歌「天兵無敵」楽譜。大阪 Stationer, K. S. 会社製の五線紙に、5行の旋律と3番までの日本語歌詞が手書きされている。伴奏はなく、作詞・作曲者名もない。この楽譜のうち、少なくとも歌詞と題名は、漢字と平仮名が滑らかに書かれているから、日本人の手になるであろう。有道惇教授によれば、日本の伝統的な五音音階に基づく旋律から、西洋古典音楽の七音音階に基づく旋律に移行する過渡的段階の軍歌である。

その歌詞は次のとおりである。その場合、第1に、旋律に合わせるための、歌詞の長音（ー）は無視した。第2に、必要な場合にはコンマで句を区切った。第3に、私の推定する漢字を〈 〉内に示した。

(1番)

虎狼のよくあきたらぬ

振天動地

硝煙砲せい〈聲〉みなぎりて

南北とーざい〈東西〉かきくれて

(2番)

せかい〈世界〉のうち、なら〈並〉びなき

敵軍狼狽

將軍馬上x〈不明〉に、けん〈剣〉をあげ

いざ、もろびと〈諸人〉まっしぐら

(3番)

さすが〈流石〉のてき〈敵〉きも〈肝〉をけし

喧囂狼籍

天地のせいざ〈正義〉に刃むかへば

いざ、かぶと〈兜〉をぬ〈脱〉いでこく来〉よ

あくま〈悪魔〉のぐんぜい〈軍勢〉はんらん〈氾濫〉す

天べい〈兵〉くだりて征す

血のかは〈川〉、また、ほね〈骨〉のやま〈山〉

せんちん〈戦陣〉みだる

にっぽんだんじ〈日本男児〉のたちさき〈太刀先〉に

あしもと〈足下〉みだれてみゆ

のが〈逃〉しはせじ、いざ、すす〈進〉め

かんせい〈歓聲〉たかし

いのち〈命〉をおしみて、に〈逃〉げまどふ

うしろ〈後〉をみく見〉せてぞ、ちく散〉る

にげ〈逃〉ゆく天地なきぞかし

みれん〈未練〉のあくま〈悪魔〉

(2) 久留米に関連する、その他の資料として次の3点を紹介する。

(a) 「久俘第五0号 展覧會場出入許可證 久留米俘虜收容所長」の小紙片と福引き札。「展覧會場出入許可證」は手書き文字の謄写印刷、「久俘第 号」はスタンプであり、「久留米俘虜收容所長」は押印され、「五0」は毛筆で書かれている。この小紙片は、レーマン関係資料の一つである展覧会案内書 1918の表紙の裏に貼り付けられている。許可證の下には20銭の福引き札⁽¹⁾2枚が差し込まれている。福引き札に最初に署名しているのは、アルトゥル・ビーバー、その次はM. 〈マックス・〉パウアーと考えられる。本稿第4節 (I) (3)の感謝状から明らかなように、両人は第3回久留米收容所美術工芸展覧会の責任者であった。

(b) 日直士官の「許可証」。これも、ごく小さな紙片に日本語で書かれている。「二月二十日午前六時ヨリ六時十五分迄ストランツ大尉室前空地ニ於テ音楽ノ合奏ヲ許可ス 二月十九日」と記され、迫斗藏の丸印が押されている。迫は久留米收容所所員の三等（遅くとも17年5月には二等）主計⁽²⁾であった。この許可証には年が記されていない。文中のストランツ大尉はH. フォン・シュトランツ大尉⁽³⁾と考えられる。

(c) 久留米市両替町杉野齒科醫院⁽⁴⁾の「リーマン殿」宛て領収書。日付は大正5 (1916) 年10月6日で、金額はYen 3.20となっている。青島捕虜には、リーマンと表記しうる士官も下士官・兵士もいなかった。また、レーマン姓の久留米收容捕虜として指揮者オットーの他にカルルがいた⁽⁵⁾。しかし、この領収書がレーマン遺品に含まれることから、宛名の「リーマン」はオットー・レーマンを意味するはずである。

(注1) 展覧會場での福引きについては、久留米收容所 1999, p. 118の写真50と久留米收容所 2003, p. 191の写真30を参照。

(注2) 久留米收容所 1999, pp. 22, 30.

(注3) 大尉ハリー・フォン・シュトランツは俘虜名簿 1915, p. 4によれば久留米收容であり、俘虜名簿 1917, p. 4によれば習志野收容であった。しかし、次の事情が考慮されるべきである。第1に、1918年8月に久留米收容捕虜の移動が実施された。習志野に移された50人の中に、シュトランツは含まれていない。收容換俘虜 1918を参照。第2に、久留米收容の(フォン・)ストランツ(シュトランツ大尉)は1919年8, 9, 11月に中国駐在あるいは東京駐在のスイス外交官あるいはオランダ外交官に宛てて手紙を送った。久留米收容所 1999, pp. 37-39を参照。この捕虜はH. フォン・シュトランツであろう。この場合にも、松尾 2003(a), 第2節 (I) (注6)のペーベルの場合と同じように、外交史料館所

蔵本俘虜名簿 1917の追加記入の信頼性が揺らぐことになる。なお、上記人物と同一と考えられるヘルマン・フォン・シュトラッツ大尉について、松尾 2002(d), 第7節第1表2-1-6も参照。久留米収容所の先任将校はアンデルス少佐であった。したがって、久留米の先任将校が「フォン・シュトラッツ少佐」であった、との記述(富田 1991, p.56)は誤りである。ただし、久留米の「少佐シュトラッツ」がジューメンス会社ドレンクハーンに捕虜用被服300着を所望したのに対して、資金不足のためにこの要求に応じることができない、とドレンクハーンは1917年10月に情報局に通告した。久留米収容所 1999, p.32. この場合にシュトラッツは捕虜代表であるかのように行動している。1916年8月にはシュトラッツはアンデルスとドレンクハーンとの間に立っていた。本稿第2節(注31)を参照。

(注4) 杉野歯科医院と杉野榮院長については、久留米収容所 2003, pp.166-167を参照。

(注5) 俘虜名簿 1917, pp.2-3 (士官のLとR), 36 (士官以外のL), 48-49 (士官以外のR)。

(7) 帰国後の音楽活動

レーマン関係資料の中に、演奏会プログラム、演奏会批評切抜などが含まれている。それらに年代順の番号を付けてみる。大型の台紙29枚の上に糊付けされていない2資料だけは、その数字に*印を付けると、(1*)だけが1914年5月で、他はすべてレーマンの帰国後である。そのために、これらを紹介する本節を、便宜上、「帰国後の音楽活動」とした。以下では、レーマンに関連する部分のみを紹介する。演奏会の時期が確定できない2資料は、番号は一連番号にして、最後に置いた。なお、レーマンは、自分に言及した文章や自分の出演部分を色鉛筆で囲い、あるいは、アンダーラインを引いている。そのために、プログラムに演奏者名が印刷されていないけれども、曲目に色鉛筆で加筆がなされている場合は、レーマンが独奏・演奏したと考えられる。

(1*) 第11年度青島音楽シーズン(1913-14年)の第15回演奏会(最後の交響楽演奏会)プログラム。王子ハインリヒ・ホテルにて<1914年>5月5日。指揮者は第3海兵大隊音楽隊指揮者O. K. ヴイレ。サン＝サーンスの「死の舞踏」をレーマン氏が独奏する⁽¹⁾。図3を参照。

(2) ヴァルトハイム教育委員会の声楽・器楽演奏会プログラム。リンデンホーフ⁽²⁾にて1920年9月4日。レーマン氏はFr. Dudlerの「伝説」と「セレナーデ」を独奏する。

(3) キュヒラー⁽³⁾からの20年11月15日付レーマン氏宛て手紙。贖罪の日の礼拝後にLecherく?のアダージオを教会で独奏するよう依頼した。

(4) ヴァルトハイム市立楽団演奏会プログラム。指揮は市音楽監督R. アイヒェル。ハム作曲、ヴァイオリンのためのボロネーズの独奏はレーマン氏。場所と年月日⁽⁴⁾は不記載。図4を参照。

(5) ヤーンズバッハ⁽⁵⁾十字架教会降臨節演奏会プログラム。1920年11月28日。ベートーヴェンのロマンス(「ト長調」の追記あり)、ヴェールマンの「夜の歌」、A. ベッカーのアダージオをコンサートマスター⁽⁶⁾・レーマンが独奏する。

(6) ヘビト署名・新聞記事「『国民の友』演奏会」。この合唱団の第1回演奏会で市立楽団団員の弦楽四重奏団はモーツァルトのアイネ・クライネ・ナハトムジーク第1楽章、ハイドンのセレナーデを演奏した。第1ヴァイオリンのレーマンは驚くほど優しく気高い音を響かせた⁽⁷⁾。

(7) 新聞広告、拡大された<ヴァルトハイム>市立楽団特別演奏会。ホテル・リヒツェンハイン⁽⁸⁾にて(「21年5月16日」の追記あり)。レーマンが独奏し⁽⁹⁾、バリトンのシュミットが独唱する。

(8) 新聞記事「リヒツェンハイン⁽¹⁰⁾の演奏会」。年月日不明のこの切抜によれば、レーマンはモーツァルト、ドゥシェク(あるいはドゥシーク)、Dridlaを演奏する。バリトンのシュミットも出演する⁽¹¹⁾。

(9) ヴァルトハイム1921年5月19日発・新聞記事。市立楽団は狩猟会館⁽¹²⁾で特別演奏会を開く。邦立ドレスデン劇場テノールのアウアーが独唱し、レーマンが独奏する。

(10) ヘビト署名・新聞記事「音楽」(「新聞」『ヴァルトハイム日報』、2?年⁽¹³⁾5月21日)の追記あり)。市立楽団の特別演奏会が狩猟会館で開かれた。レーマンは弦楽の伴奏でモーツァルトのクラリネット四重奏曲からラルゲット、ドゥシェク(あるいはドゥシーク)のメヌエットを演奏した。この芸術家の活動が——周知のように彼はヴァルトハイムの子供である——彼の郷里に長く保たれ、独奏者としての彼が、住民の一部だけではなく、評価されることが望まれる。テノールのアウアーも出演した。

(11) ヴァルトハイム・ガーベルスベルガー速記者協会第30回記念祝典演奏会プログラム。リンデンホーフにて1921年6月3日(祝典の1日目)。アイヒェルの指揮する<ヴァルトハイム>市立楽団とともに、レーマンはハム作曲ボロネーズを独奏する。2日目には「劇場」がある。

(12) b6署名・新聞記事「ガーベルスベルガー速記者協会」。同協会の第30回記念祝典演奏会でレーマンなどが演奏した。

(13) 見出しのない新聞記事(「21年6月22日」の追記あり)。リンデンホーフで催された映画上映会⁽¹⁴⁾で、レーマンの指揮するヴァルトハイム市立楽団は、すばらしい伴奏をした。

(14) ヴァルトハイム聖ニコライ教会演奏会プログラム. 1921年11月13日. 教会音楽監督キュヒラー主宰. レーマンはベートホーフエンのロマンス・ト長調, ナルディーニのアダージョ・カンタービレ, タルティーニの「ヴァイオリンのためのアリア」を独奏する.

(15) ベルビヒ署名・新聞記事「教会の演奏会」(『<新聞>『ヴァルトハイム・アンツァイガー』, 1921年11月14日)の追記あり). キュヒラー主宰の教会合唱団は音楽会を催した. ベートホーフエンのロマンスは厄介な曲である. 偉大なヴァイオリン奏者, レーマンに任せるのが, 一番良い.

(16) H署名・新聞記事「教会の演奏会」(『ヴァルトハイム日報』, 1921年11月14日)の追記あり). レーマンの演奏は傾聴された. 彼の繊細で, 柔和な音色が広い教会を通り抜けていった. これは美しい音楽の捧げものを郷土の若い音楽家とともに与えることができたことは, オルガンで伴奏した教会音楽監督にとって喜びであつたろう.

(17) 新聞広告「ゲルマニア男声合唱団の演奏会」. リンデンホーフにて11月16日⁽¹⁵⁾. コンサートマスター・レーマンはベルビヒ, ハンケ氏とともに出演する.

(18) ヴァルトハイム1921年11月14日発・新聞記事「地域とザクセン」. 11月16日のゲルマニア男声合唱団の演奏会で, ベートホーフエン⁽¹⁶⁾のピアノ三重奏曲からアンダンテとスケルツォが演奏される.

(19) ヴァルトハイム・ゲルマニア男声合唱団演奏会プログラム. リンデンホーフのホールで1921年11月16日. コンサートマスター・レーマン, チェロ・ベルビヒ氏, ピアノ・ハンケ氏はシューベルトの三重奏曲変ホ長調からアンダンテとスケルツォを演奏する. このプログラムには, 同合唱団のレーマン宛1921年11月28日付け礼状も添えられている.

(20) シュミット署名・新聞記事「ゲルマニアの演奏会」(『ヴァルトハイム日報』, 1921年11月17日)の追記あり). 昨日のゲルマニア男声合唱団演奏会で, レーマン, ベルビヒ, ハンケ3氏の三重奏団はシューベルトの三重奏曲変ホ長調, 作品100から, アンダンテとスケルツォを演奏し, 喝采された.

(21) r署名・ヴァルトハイム1922年4月10日発・新聞記事「地域とザクセン」. 昨日ヴァルトハイムでプロレタリアの自由思想家連合とドイツ元論者連盟のヴァルトハイム地域支部は, 初めて無宗教の青年清祓式を学校の体育館で行なった. 演奏会の最後に, モーツァルトのラルゲットがヴァイオリンとピアノによって演奏された. 卓越した演奏は列席者を感動させた⁽¹⁷⁾.

(22) 社交協会「明朗」記念演奏会プログラム. 狩猟会館にて1922年10月30日. レーマンはベリオのヴァイオリン協奏曲第1番二長調⁽¹⁸⁾を独奏し, ピアノ三重奏のセレナーデに参加する.

(23) <ヴァルトハイム>市立楽団演奏会プログラム. 狩猟会館にて1922年11月26日. レーマンはベリオのヴァイオリン協奏曲第1番二長調⁽¹⁸⁾を独奏する. また, ドヴォルジャークのドゥムキー三重奏曲の演奏(チェロはツェンナー, ピアノは不記載)に参加する.

(24) 「国民の友」合唱団記念演奏会プログラム⁽¹⁹⁾. シュヴァイツァーター⁽²⁰⁾で3月10日に開かれる地区議会の議員に敬意を表して, レーマンはピアノのヴィンクラーとともに, ピアノ三重奏(ハイドン, ポップの「白鳥の歌」, ドヴォルジャークのドゥムキー三重奏曲)に参加する.

(25) H署名・新聞記事「『国民の友』演奏会」(『ヴァルトハイム日報』, 1923年3月5日)の追記あり). 合唱団の演奏会はリンデンホーフで行なわれた. レーマン, ハンケ, ツォイナー⁽²¹⁾によるピアノ三重奏は喜びを与えた. ハイドンは美しい古典的な美に関して, ドヴォルジャークは, 珍奇さと些事の混ぜ込まれた, スラヴ的な様式において, 演奏はまったく堂々としていた⁽²²⁾.

(26) 新聞記事「リンデンホーフの演奏会」. 「国民の友」合唱団の演奏会でレーマン, ハンケ, ツェンナーはピアノ三重奏を演奏した. ドヴォルジャークの三重奏曲は長かったけれども, 新鮮さと活気によって聴衆を放さなかった. それぞれの独奏者はその楽器に熟達していた. 3人の共演はすばらしい音楽を生んだ⁽²³⁾.

(27) 室内楽演奏会プログラム. グライフェンシュタイン⁽²⁴⁾にて1923年5月8日. レーマンはベリオのヴァイオリン協奏曲第1番⁽¹⁸⁾を独奏する. さらに, ツェンナー, バイガンクとともにピアノ三重奏曲(ハイドンの第1番とドヴォルジャークのドゥムキー三重奏曲)を演奏する.

(28) ヴァルトハイム第1水泳協会記念式典プログラム. リンデンホーフにて1923年6月2日. レーマンは, 拡大した市立楽団を指揮する. また, ベリオ作曲「さまざまな歌」, 第7番を独奏する.

(29) 「元戦時捕虜の会」第3回祝典招待状. シュヴァイツァーター⁽²⁵⁾にて1923年7月14日. レーマンはヴァイオリンを独奏する.

(30) クリーベター⁽²⁶⁾「自由な歌手」男声合唱団記念式典プログラム. 1923年10月14日, 場所不記載. レーマン, ミュラー, ツェンナーはピアノ三重奏曲(メンデルスゾーン, ニ短調と<カルル・ゴットリーブ・>ライシガーの第1番第1楽章)を演奏する.

(31) 「家族の夕べ」プログラム. 1923年12月1日, 場所不記載. レーマンはスヴェンセンのロマンス, シューベルトのアヴェ・マリア, ドルドラのセレナーデ, グリーグの「ソルヴェークの歌」, Jaremitz のジブシー幻想曲, ブルメスターの

古歌を、ピアノとともに演奏する。

(32) ヴァルトハイム・パン製造業者組合の冬季慰安会プログラム。狩猟会館にて1924年2月4日。レーマンはペリオ作曲「さまざまな歌」を独奏する。

(33) ヴァルトハイム・リヒツェンハイン体操協会記念式典プログラム。リヒツェンハインにて1924年3月15日。レーマンはペリオ作曲「さまざまな歌」を独奏する。

(34) 室内楽演奏会プログラム。ホーンドルフの「白い子羊亭」⁽²⁶⁾にて1924年3月20日。レーマンはツェンナー、ハンケとともに、ベートーヴェンのカカドゥ変奏曲、ガーゼのピアノ三重奏曲、ヘ長調、作品42を演奏する。また、ドルドラのポエムとドヴォルジャークのユーモレスクを独奏する。

(35) ヴァルトハイム市立楽団演奏会プログラム。場所・年月日不記載。邦立ドレースデン歌劇場の室内楽演奏家フレーベルが、フロトーの歌劇マルタ前奏曲、ヴェーバーの歌劇「魔弾の射手」前奏曲、ヴァーグナーのタンホイザーから巡礼の合唱、レオンカヴァッロ作曲の道化師から幻想曲を指揮する。メルビッツはビゼーのカルメンからミカエラのアリアを歌う。コンサートマスター・レーマンはペリオの幻想舞踊曲を独奏する。

(36) 新聞広告「25人に拡大された市立楽団の特別演奏会」。狩猟会館にて4月1日、火曜日⁽²⁷⁾。邦立ドレースデン歌劇場から室内楽演奏家フレーベル(客演指揮者)と女性歌手メルビッツを迎える。コンサートマスター・レーマンが独奏する。

(37) 新聞記事「狩猟会館での演奏会」。25人に拡大された、元市立楽団の4月1日、火曜日⁽²⁷⁾の演奏会でフレーベルは「マルタ」前奏曲と「魔弾の射手」前奏曲、タンホイザーから巡礼の合唱、道化師から幻想曲を指揮する。ドレースデンのメルビッツもミカエラのアリアを歌う。郷土のコンサートマスター・レーマンが独奏して、我々を喜ばせるであろう。

(38) H署名・新聞記事「市立楽団演奏会」。フレーベル⁽²⁷⁾が指揮した、この音楽会は実際には市立楽団の演奏会ではなかった。参加した音楽家の多くは、外部の人たちであったからである。客席は3分の1しか埋まらなかった。コンサートマスター・レーマンはペリオの幻想舞踊曲を独奏して、暖かい喝采を浴びた。

(39) マイアー署名・新聞記事「市立楽団の演奏会」。インフレーションによって市立楽団が吹き飛ばされた都市の一つが、残念ながらヴァルトハイムである。かつての市立楽団団員で、残っている人々は、臨時の手伝い人とともに芸術活動を再開した。火曜日⁽²⁷⁾の演奏会がこれを証明する。フレーベルが指揮者であった。コンサートマスター・レーマンはペリオの幻想舞踊曲を演奏して、大きな成功を収めた。ソプラノ歌手メルビッツはミカエラのアリアを才能豊かに歌った。遺憾ながら聴衆が少なかった。ヴァルトハイム市民は楽団の努力を一層評価すべきである。

(40) ヴァルトハイム1924年6月21日発・新聞記事「地域とザクセン」。第4回全国労働者スポーツ大会のために「国民の友」合唱団はリンデンホーフで夜に演奏会を開く。それにはレーマンなど3人の音楽家が出演を約束した。

(41) 1924年ヴァルトハイム労働者スポーツ大会演奏会プログラム⁽²⁸⁾。レーマンはピアノ三重奏曲(ベートーヴェンのセレナーデと〈モーリツ〉モシコフスキの「5つのスペイン舞曲」)の演奏に参加する。

(42) 新聞記事「1924年全国労働者スポーツ大会」。ヴァルトハイム労働者スポーツ連合が主催した、リンデンホーフの音楽会⁽²⁹⁾には、ヴァルトハイム「国民の友」合唱団、クレーベタール「自由な歌手」合唱団、ヴァルトハイム=R、〈リヒツェンハイン〉男声合唱団が参加した。演奏会を支援した一人がレーマンであった。レーマンたちはピアノ三重奏曲(ベートーヴェンのセレナーデとモシコフスキの「5つのスペイン舞曲」)を演奏した。すぐれた演奏は十分な喝采に値した。

(43) 「元戦時捕虜の会」第4回祝典招待状。〈ホテル〉シュヴァイツァータールにて1924年6月28日。レーマンは楽団の伴奏でロマンスを独奏する(楽団名も作曲者名も不記載)。

(44) 全国共和主義者同盟ヴァルトハイム地区集団主催の憲法祝典。リンデンホーフにて1924年8月11日。レーマンは三重奏曲2曲を演奏する。

(45) ロスヴァイン市民狩猟協会演奏会プログラム。狩猟会館広間にて1924年9月26日。レーマンはBeckerのアマティ・セレナーデを演奏する。

(46) ヴァルトハイムと周辺地区の理髪師・髻製作者強制組合25周年記念大会プログラム。ホテル・ヴァルトハイム=Rリヒツェンハインにて9月29日。レーマンは少なくともロマンスを独奏する。

(47) 新聞記事「理髪師・髻製作者強制組合25周年記念大会」。ホテル・ヴァルトハイム=R、〈リヒツェンハイン〉のホールにて⁽³⁰⁾。これはヴァルトハイムと周辺地区の組合の大会であった。レーマンのヴァイオリン独奏は効果的であった。

(48) ヴァルトハイム・ガーベルスベルガー速記協会2周年記念演奏会招待状。リンデンホーフのホールにて10月18日(土曜日⁽³¹⁾)。強化された元ヴァルトハイム市立楽団(指揮者シュリーヒト)が出演し、コンサートマスター・レーマンはペリオの協奏曲第9番を独奏する。

(49) ヴァルトハイム自然療法協会記念演奏会プログラム。狩猟会館にて1924年10月27日。演奏はヴァルトハイム市立楽団。レーマンはスヴェンセンのロマンスを独奏する。

(50) ヴァルトハイム刑務所⁽³²⁾の教会における演奏会プログラム。1924年宗教改革記念日〈10月31日〉。レーマンはベート

ホーフェンのピアノ三重奏曲（変ロ長調とセレナーデ）を演奏する。

(51) ヴァルトハイム国民劇場「演奏と朗読の夕べ」プログラム。狩猟会館にて12月10日（水曜日⁽³³⁾）。レーマン、ベルビヒ、ハンケの3氏はピアノ三重奏曲（ベートーヴェン、作品70の1, 第1楽章とヴェーバー、作品63）を演奏する。

(52) 新聞記事「ヴァルトハイム国民劇場」。レーマン、ベルビヒ、ハンケの3氏の郷土のピアノ三重奏団はすでに定評がある。彼らの演奏は心からの拍手に値した⁽³⁴⁾。

(53*) 新聞広告「大演奏会」。ホテル・ツー・ヘロルト⁽³⁵⁾の新ホールで1925年5月16日。レーマンはライブツィヒのヘルマン（ピアノ）、トゥームの女声歌手パウク＝ヴァーグナーと出演する。

(54) 〈ヴァルトハイム〉城内教会復旧記念演奏会プログラム。1926年12月19日。レーマン⁽³⁶⁾、ベルビヒ、ハンケはピアノ三重奏曲（チャイコフスキー、作品50, イ短調, 第1楽章⁽³⁷⁾とシューベルト、作品100, 変ホ長調）を演奏する。

(55) 新聞広告「ベルトルト・コーヒー店」（「1930年」の追記あり）。レーマンの、情緒豊かなムード・オーケストラはクリスマス、大晦日、元日、毎日曜日に4時から演奏する。

(56) 社会主義的労働者青年団「記念の夕べ」プログラム。リンデンホーフにて1931年10月3日。ハイドンの交響曲2曲（ニ長調からアンダンテ、第8番から終楽章）が弦楽四重奏で演奏される。この2曲に赤線が引いてある。レーマンたちが演奏するのであろう。

(57) ヴァルトハイム「国民の友」合唱団35周年演奏会プログラム。ケムニッツ地方労働者合唱団員参加。ホテル・シュヴァイツァーター⁽³⁸⁾にて10月30日（「1931年」の追記あり）。〈ウイリアム・ヴィンセント・〉ウォーレス作曲「マリターナ」前奏曲、チャイコフスキー作曲「悲しい歌」⁽³⁹⁾、メンデルスゾーン作曲「異国からの帰郷」前奏曲、J. シュトラウスの「ヴィーン気質」に赤線が引いてある。レーマンたち⁽⁴⁰⁾が演奏するのであろう。

(58) ドイツ工場労働者同盟ヴァルトハイム支所記念式典演奏会プログラム。主催はヴァルトハイム社会主義青年団音楽集団、クリーベタル人民合唱団とヴァルトハイム体操協会。1931年12月20日。楽長レーマンの四重奏団は弦楽四重奏曲（チャイコフスキー、作品11、ベートーヴェン、作品20⁽⁴¹⁾、メンデルスゾーン、作品44の1）を演奏する。

(59) ドイツ一般労働組合ライスニヒ地区委員会の演奏会プログラム。ホテル・ヨハニスタールにて1月29日⁽⁴²⁾。演奏は15人のライスニヒ・ツァドラシル楽団。裏面によれば、第1部はG. ベプケ編曲のヴァーグナー「リエンツィ」幻想曲、ヨハン・シュトラウス「芸術家の生涯」などから構成されている。第2部でハイドン「交響曲 太鼓連打」からアンダンテ、オスカル・シュトラウスの「ワルツの夢」のメドレー曲などが演奏される。

(60) Nk 署名・新聞記事「ヨハニスタールの演奏会」（「ライスニヒ日報」、1932年1月30日）の追記あり）。ドイツ一般労働組合ライスニヒ地区委員会は昨夜レストラン・ヨハニスタールのホールで演奏会を催した。15人に拡大されたアルベルト・ツァドラシル楽団が演奏した。リエンツィ幻想曲は、入れ替わるリズムによって〈楽団の〉力量を試したが、非難の余地なく演奏された。シュトラウスの「芸術家の生涯」は、鳴りやまぬ喝采を呼び起こし、アンコールが必要となった。第2部の大詰め、「ワルツの夢」でも聴衆は、鳴りやまぬ拍手によって、アンコール2曲を引き出した。大きな才能を備えたレーマン氏の指揮の下で、あらゆる精緻さが残りなく達成された。様式の整った演奏は正当な印象をこの演奏会に与えた。ツァドラシル楽団は、最も洗練された要求を満たさねばならない演奏会の音楽を演奏できることを証明した。

(61) ドイツ自由思想家同盟ヴァルトハイム地区団体主催青年祭プログラム（「1932年」の追記あり）。ヴァルトハイム市立学校体育館にて3月20日。演奏指揮者はコンサートマスター・レーマンである。ロイヒナーのフリーデマン・バッハ組曲、第2楽章、ラフマニノフの前奏曲、嬰ハ短調、〈エドワール・〉トゥレミゾーの交響詩、サランボー、第1楽章、第3楽章が演奏される⁽⁴³⁾。

以下は時期が確定できない。

(62) ヴァルトハイム市立楽団演奏会プログラム。場所・年月日不記載。指揮者はシュエリヒト。コンサートマスター・レーマンはスヴェンセンのロマンスを独奏する⁽⁴⁴⁾。

(63) 男声合唱団ゲルマニア演奏会入場券。日時・場所不記載⁽⁴⁵⁾。レーマン、ベルビヒ、ハンケの3氏はガーゼの三重奏曲へ長調を演奏する。

本節の資料は、久留米収容時代を除いて、開戦直前の青島と帰国後のヴァルトハイムにおけるレーマンの音楽活動を示している、と考えられる。時期を確定できない2資料は、1925年前後のものである。

松尾 2003(a), 第3節(6)で紹介したレーマン履歴書によれば、レーマンは1920年3月に久留米から帰郷し、しばらく休養した後、ヴァルトハイム市立楽団に入った。そして、1927年2月まで同楽団のコンサートマスター（就任の正確な時期は不明）であった。

本節の資料で見ると、資料(4)の演奏会でレーマンは初めて、ヴァルトハイム市立楽団の独奏者となり、市音楽監督R. アイヒェルの指揮下で独奏した。この演奏会の期日はプログラムに記載されていない。しかし、レーマン「氏」独奏

とあるので、1920年11月28日以前と推定される。彼は11月28日の資料(5)以後はコンサートマスターと称されるからである。レーマンは1922年11月(23)と1924年10月(49)の演奏会でも、ヴァルトハイム市立楽団⁽⁴⁶⁾の独奏者であった。指揮者としてはレーマンはすでに1921年6月にヴァルトハイム市立楽団(13)を指揮して、映画の伴奏をした。また、拡大した市立楽団(28)を1923年6月に指揮した。

再びレーマン履歴書に戻ると、レーマンは1927年3月から1930年8月まで、映画館の伴奏音楽家であった。そして、1933年初めにナチス経営細胞組織の音楽顧問となり、同年11月にヴァルトハイム地区音楽家集団指導者に任ぜられた。1933年の肩書きは、彼の履歴書の文言から推量すると、演奏による収入の伴わない、一種の名誉職ではないであろうか。

1927年初めから30年までは音楽活動の空白期である。1930年以後の活動は本節の資料(55) — (61)に示される。資料最後の演奏会(1932年3月)の彼は指揮者であった。

(注1) この演奏会ではレーマンの他に、上海の女性ピアノ奏者フォン・デア・ライテンもグリーグのピアノ協奏曲イ短調を独奏する、とある。プログラム裏面には、ポピュラーな曲を演奏する、5月19日の第16回演奏会が今音楽シーズン最後のものになる、と印刷されている。したがって、1914年5月5日の音楽会は第3海兵大隊音楽隊の最後の交響楽演奏会となったはずである。それから3月余り後に日本が宣戦し、同軍楽隊は解散したからである。さらに、レーマンが青島に到着したのは、5月5日の演奏会の2月余り前であった。——有道惇教授によれば、サン＝サーンスの「死の舞踏」は難曲である。また、この演奏会プログラムからヴィレ指揮・第3海兵大隊音楽隊の高度な力量が窺われる。

(注2) リンデンホーフは、かつてヴァルトハイムにあったホテルである。長男回答。

(注3) キュヒラーはヴァルトハイム聖ニコライ教会音楽監督であろう。キュヒラーが主宰する、1921年11月13日の同教会の音楽会、下記(14)でもレーマンは演奏したからである。

(注4) この演奏会の時期は1920年11月28日以前と考えられる。レーマンがコンサートマスターでなく、「氏」と呼ばれているからである。なお、アイヒェルはレーマン履歴書によれば、1910年から市音楽監督であった。

(注5) ヤーンズバッハはケムニッツ県アナベルク郡の村であった。HOS 1957, S.267.

(注6) 彼がヴァルトハイム市立楽団のコンサートマスターに就任した期日は、レーマン履歴書に明示されていない。このプログラムによれば、入団して半年ほどでこの地位を得たことになろう。コンサートマスターの称号は以後の紹介では省略する。

(注7) この切抜の裏面に1921年4月18日付の「会葬御礼」が印刷されている。したがって、合唱団演奏会はその直前に開かれたであろう。

(注8) ホテル・リヒツェンハインはかつてヴァルトハイムにあった。長男回答。

(注9) 下記の切抜(8)によって、レーマンの演奏曲目が明らかになる。

(注10) リヒツェンハインはヴァルトハイム西方の村であった。1905年に分割されて、多くはヴァルトハイム市に、一部はハルタ市に編入された。HOS 1957, S.170.

(注11) 場所とソロの出演者が同じなので、これは上記(7)の1921年5月16日の演奏会に関する記事であろう。

(注12) ヴァルトハイムの狩猟会館はかつてホテルであった。長男回答。

(注13) 「2?年」の追記は上記の切抜(9)によって1921年と判断できるであろう。

(注14) これは速記者協会祝典第2日の行事であったろう。1日目については上記(11)を参照。

(注15) 同ページの別の広告に「1921」年の文字を読み取ることができる。

(注16) これは資料(19)のプログラムから見れば、シュューベルトの誤記であろう。

(注17) 最後に訳出した2文章が、色鉛筆で囲ってあるので、レーマンたちがモーツァルトを演奏したのであろう。

(注18) シャルル=オーギュスト・ド・ベリオ(1802-1870)は10曲のヴァイオリン協奏曲を作曲した。音楽大事典1983, p.2282.レーマンが(22)と(27)で独奏した第1番(ニ長調)は、レーマンが1918年9月18日に久留米収容所の演奏会でピアノのツァイスと演奏した「ニ長調」と同じ曲であろうか。

(注19) この演奏会で、エルヴィン・レントヴァイ作曲、日本の古い詩による女声合唱組曲、「ニッポン」が演奏される。交流史と音楽史におけるこの合唱組曲の評価は私の能力を超えている。また、下記(25)の新聞記事から、プログラムに未記載の年月は1923年3月であろう。

(注20) シュヴァイツァーテールはかつてヴァルトハイムのホテルであった。長男回答。

(注21) このチェロ奏者は、別の個所でツェンナーと表記されている人物と同じであろう。

(注22) この音楽批評家は女声合唱組曲ニッポンについて、我々のものから遠く隔たっている日本音楽が、団員たちの真剣な努力によって再現された、と論評している。

(注23) これは上記(25)の演奏会についての記事であろう。

(注24) グライフェンシュタインはケムニッツ県アナベルク郡のエーレンフリーダースドルフ市にある古城であった。

HOS 1957, S. 266.

(注25) クリーベタルはライプツィヒ県デーベルン郡の村であった。HOS 1957, S. 161.

(注26) ホーンドルフという村は、ザクセンにいくつかあった。「白い子羊亭」なるホテルがあったのは、グラウヒャウ郡のホーンドルフであった。長男回答。

(注27) 4 切抜 (36) - (39) は発行年ないし年月日が不明である。それらは、フレーベルが指揮し、メルビッツが独唱し、レーマンが独奏する、4 月 1 日、火曜日の演奏会を問題にしている。上記 (35) のプログラムの音楽会である。しかも、この日に演奏したのは、本来の市立楽団ではなく、市立楽団は「インフレーションによって・・・吹き飛ばされた」。ところで、1920-32年に4月1日が火曜日であった年は、1924年と1930年だけである。20世紀全記録 1987, pp. 346, 436. さらに、インフレーションが最も激しく進行したのは、1923年であった。したがって、問題の演奏会は1924年4月1日に開催されたであろう。

(注28) これは、上記 (40) の新聞記事が記した、6 月下旬の演奏会である。

(注29) これは、上記 (41) のプログラムの演奏会についての記事である。

(注30) この記事の裏面に「1925年の復活祭のために云々」の求人広告があるから、上記 (46) をも考慮すると、音楽会は1924年9月29日に行われたはずである。

(注31) 10月18日と土曜日が重なるのは、1924年と1930年である。20世紀全記録 1987, pp. 352, 442. 強化された元ヴァルトハイム市立楽団は、1924年4月の (36) - (39) にも言及された。したがって、年不記載のこの演奏会は1924年10月18日開催と考えられる。

(注32) ヴァルトハイム刑務所で数回演奏したことは、レーマン履歴書に言及されている。

(注33) 12月10日と水曜日が重なるのは、1924年と1930年である。20世紀全記録 1987, pp. 355, 445. レーマン、ベルビヒ、ハンケによる三重奏曲演奏は1926年に確認される(本節 (54) を参照) から、この演奏会は1924年12月10日に開かれたであろう。

(注34) これは上記 (51) の演奏会についての記事である。

(注35) ホテル・ツー・ヘロルトはアナベルク郡ヘロルト村にあった。長男回答。

(注36) レーマンの肩書は楽長となっている。

(注37) これは、レーマンが1919年5月15日に久留米収容所の「室内楽の夕べ」で共演した曲、「偉大なる芸術家の思い出」の中の「悲歌的楽章」である。松尾 2003(a), 第2節(Ⅲ)を参照。

(注38) ホテル・シュヴァイツァータールはヴァルトハイムにあった。長男回答。

(注39) 「悲しい歌」の原曲は作品40の2であろう。小川 1975, p. 262. したがって、プログラムの chans は chanson の誤植であろう。

(注40) これは、追記によれば、レーマンの他にバス1人、フルート1人、トランペット1人、チェロ兼打楽器1人、楽器不記載1人、計6人から成る楽団であろう。

(注41) ベートホーフンの作品20は7重奏曲である。音楽大事典 1983, p. 2260.

(注42) このプログラムに下記 (60) の新聞切抜が糊付けされているから、音楽会の年は1932年のはずである。なお、表面に薄く手書きされた文字によると、この楽団は指揮者レーマン、ヴァイオリン2人、助奏〈ヴァイオリン〉1人、チェロ1人、バス1人、フルート1人、オーボエ1人、クラリネット1人、トランペット2人、トロンボーン1人、打楽器2人、ピアノ1人の15人から構成されていた。

(注43) 1929, 1930, 1931年の自由思想家同盟およびドイツ元論者同盟ヴァルトハイム地区集団の青年祝祭のプログラムは、レーマン関係資料に含まれる。しかし、レーマンを含む指揮者・演奏者名はそこに印刷されておらず、色鉛筆による加筆もない。そこで、本稿は彼の出演を想定しなかった。

(注44) レーマンとヴァルトハイム市立楽団(指揮者は不明)は、1924年10月にスヴェンセンのロマンスを演奏した(49)。ただし、後者の主催者は(62)の市立楽団と異なって、自然療法協会であった。

(注45) レーマン、ベルビヒ、ハンケは1926年に三重奏曲を演奏(本節 (54) を参照) し、おそらく1924年にも演奏した(本節 (51) と (52) を参照)。したがって、この演奏会は1925年前後に開かれたであろう。

(注46) 1924年10月27日(49)の演奏はヴァルトハイム市立楽団とされている。それに対して、(39)の述べる事情は異なる。すなわち、1924年4月1日の市立楽団演奏会は本来のヴァルトハイム市立楽団の演奏会ではなく、同楽団は第一次大戦後の「インフレーションのために・・・吹き飛ばされた」、というのである。市立楽団は1924年4月1日以前に解散したのであろう。それは半年後には再建されたのであろうか。レーマン履歴書は、その上に、1929年のヴァルトハイム市立楽団再編についても述べている。

(8) 終わりに

オットー・レーマンの履歴書と音楽活動資料が記しているより後の時代について、長男からは次のような文章も寄せられた。第1に、レーマン履歴書が書かれた1934年以後にも、レーマンは生活の本拠をヴァルトハイムに置いていた。第2に、1934年以後については、経歴に係わる文書がない、彼は郵便局やナチス党のドイツ労働戦線で働いたようである。1945年初めに民族突撃隊隊員となり、直ぐに負傷した。同年2月末にベルリンで逮捕され、5ヶ月後に解放されて、ヴァルトハイムに戻った。それから1952年まで独立のダンス音楽演奏者として過ごした。その後、ある工場の文書管理担当者として働き、その工場の楽団を指揮した。彼は1960年に年金生活者となったが、聴覚障害と視覚障害に苦しむようになり、遺書を残さずに自死した。

久留米収容所楽団の指揮者であったオットー・レーマンは、苦学しつつドレーズデン音楽学校を卒業し、音楽家として歩み、まず、兵役義務を軍楽隊隊員として果たそうとした。ザクセンの諸部隊に空席がなかったために、彼は植民地青島駐屯のドイツ第3海兵大隊に応募した。青島では同大隊音楽隊に入り、同音楽隊の演奏会で独奏者としてデビューした。しかし、間もなく日独戦争が勃発し、レーマンは久留米収容所に5年余り拘束された。久留米で彼は146回に亘って、収容所楽団を指揮した。また、室内楽の公演にしばしば参加した。

レーマンは解放・帰国後、ヴァルトハイム市立楽団に入団し、程なく独奏者としてデビューした。そして、コンサートマスターに就任した。この地位をレーマンは履歴書によれば1927年に離れた。退任の理由は不明である。しかも、1924年11月以後はレーマンは同市立楽団の独奏者とはならなかった。

ヒトラーが政権を掌握した1933年初めから、レーマンはナチス党と関係するようになり、第二次大戦敗戦を挟んで5ヶ月間、拘留された。ドイツ民主共和国の下ではナチスも植民地主義も厳しく批判されたから、周囲の状況はレーマンにとって厳しく、彼はひっそりと過ごしたであろう。

長男に対しても過去を語らなかったレーマンについて、長男は次のように推測している。レーマンはクラシック音楽にのみ関心を持ち、金銭も事務も重視しなかった。彼は、自分の好みに合わぬダンス音楽によって生計を立てざるをえなかったこと、大不況後には、社会民主党に近い立場を棄て、しかも、音楽と無関係な職務に就かねばならなかったこと、に不満であった。ドイツ民主共和国の社会主義は「砂糖桶」ではなかったけれども、ともかくもレーマンに職を与えた。「私(長男)が音楽的才能を受け継いでいたならば、父は喜んだであろうが」。

長男が述べる、社会民主党に近い立場に関して、本稿第7節の資料のいくつかはレーマンの政治的傾向を示唆していると考えられる。すなわち、特徴的な団体の主催する演奏会に、レーマンは出演したからである。主催団体は、1922年4月のプロレタリアの自由思想家連合とドイツ元論者連盟のヴァルトハイム地域支部(21)、1924年6月のヴァルトハイム労働者スポーツ連合(42)、同年8月の全国共和主義者ヴァルトハイム地区集団(44)、1931年10月の社会主義的労働者青年団(56)、同年12月のヴァルトハイム社会主義青年団音楽集団など(58)、1932年1月のドイツ一般労働組合ライスニヒ地区委員会(59)(60)、同年3月のドイツ自由思想家同盟ヴァルトハイム地区団体(61)であった。また、1924年全国労働者スポーツ大会記念演奏会的主催者は必ずしも明確でない((40)と(42))けれども、「国民の友」合唱団はこの演奏会に深く関わっていた。この合唱団の1923年(24)と1931年(57)の演奏会にレーマンは出演した。これも労働組合に対するレーマンの親密な関係を間接的に物語るであろう。

Musikalische Tätigkeiten Otto Lehmanns aufgrund seines Nachlasses (Geringswalde 1892–Waldheim 1971)

Nobushige Matsuo

- (1) Vorschläge für Statuten der Kurume–Lager–Kapelle 1915 und Namenverzeichnis derselben Kapelle 1919
- (2) Abrechnungen des Musik–Fonds 1915–1919
- (3) Andere Abrechnungen
 - (I) Rechnungen und Quittungen über Sehnen und Noten
 - (II) Beiträge zum Kontrabaß der Kapelle und zu den österreichischen Soldaten
 - (III) Abrechnungen der Lichtgenossenschaft G. m. b. H. Baracke Nr. 16
 - (IV) Sonstige
- (4) Dankbriefe an O. Lehmann und Ausschnitte der Zeitungen
 - (I) Dankbriefe an O. Lehmann 1918–1919
 - (II) Ausschnitte der Zeitungen 1915–1916
- (5) Namentliche Liste der Teilnehmer am Theater in Kurume 1919
- (6) Musikalische Noten usw.
- (7) Musikalische Tätigkeiten O. Lehmanns nach der Heimkehr
- (8) Zum Schluß